

平成 21 年度卒業論文

ポーランドの騎兵フサリアについて  
**Husaria - Polska Kawaleria**

東京外国語大学 外国語学部

総合文化コース

ポーランド文化ゼミ所属

ポーランド語専攻 4 年

6806106

八木 絢子

(Junko YAGI)



## 目次

目次	3
はじめに	5
第一章 フサリアの基本事項	6
1. フサリアとは	6
2. フサリアの誕生から消滅まで	7
3. フサリアが活躍した戦い	10
a) キルホルムの戦い(Bitwa pod Kircholmem)(1605)	11
b) クウシンの戦い(Bitwa pod Kłuszynem)(1610)	12
c) ホチムの戦い(Bitwa pod Chocimiem)(1621)	13
4. フサリアの装備品	17
5. フサリアの戦闘方法	18
第二章 教育におけるフサリアの描写	20
1. トルコとの戦い①——ツェツォラの戦い(1620)、ホチムの戦い(1621)	20
a) ツェツォラの戦い	20
b) ホチムの戦い	21
2. フミェルニツキの乱(1648)	25
a) ザポロージェのコサック	25
b) 反乱の原因	26
c) 反乱勃発	26
3.	
a) 原因	28
b) キルホルムの戦い	29
c) オリヴァの戦い	29
d) スウェーデンのポーランド襲撃——シュラフタの裏切り	30
e) ヤスナ・グラの防衛(1655)	31
f) チャルニェツキの活躍と農民の参加	31
g) プロイセンの臣従の終焉と戦いの終結	32
4. トルコとの戦い②——カミェニェツ・ポドルスキの包囲(1672)、第二のホチムの戦い(1673)	42
a) カミェニェツ・ポドルスキの包囲	42
b) ホチムの戦い	42
5. ウィーン包囲(1683)	48
6. まとめ	52
第三章 文学におけるフサリアの表象	54

1. セヴェリン・ゴシュチンスキ(Seweryn Goszczyński / 1801-1876) .....	54
2. ヘンリク・シエンキェーヴィチ(Henryk Sienkiewicz / 1846-1916) .....	57
3. スタニスワフ・ヴィスピャンスキ (Stanisław Wyspiański / 1869-1907).....	61
4. まとめ .....	65
<b>第四章 絵画におけるフサリアの描写</b> .....	<b>67</b>
1. 版画におけるフサリア.....	67
2. ヤン・マテイコ、ユゼフ・ブランド、ヴォイチェフ・コサックの絵画におけるフサリア .....	74
a)ヤン・マテイコ(Jan Matejko / 1838-1893).....	74
b)ユゼフ・ブランド(Józef Brandt / 1841-1915).....	80
c)ヴォイチェフ・コサック(Wojciech Kossak / 1856-1942).....	83
3. まとめ .....	87
おわりに .....	88
参考文献 .....	90
参考図版 .....	91

## はじめに

かつてはその軍事力によって「ヨーロッパの防壁」の役割を果たしていた強大国ポーランドは、三国分割によって国家が消滅してしまった。ポーランドの黄金時代を語る上で、ポーランドが大勝した戦いをはずすことはできない。ポーランド軍の中で主力として活躍したのがフサリアである。重騎兵であるフサリアは身体を鎧で包み、剣や長槍を手に持ち、翼を背負い、駿馬を操った。その技術は他の軍をはるかに凌ぎ、ヨーロッパを長年苦しめていたタタールやトルコを撃退してきた。他国で見ることがないフサリアの姿は、諸外国で注目されると共に、ポーランド国内においても、勝利や過去の栄光の象徴として受け入れられてきた。特に、分割期や両大戦間期では、ポーランド的なものとして文学や絵画の中で多く取り上げられた。ポーランド文化においてフサリアは重要な要素だと思い、本論文のテーマとして取り上げることにした。

本論文では、まず第一章ではフサリアの基本的な情報、つまり歴史、活躍した戦い、戦法、装備について触れる。第2章では人々の知識を形成する上で重要な役目を果たす教育において見られるフサリアの姿、第3、4章ではポーランド文化の中の文学と絵画を取り上げる。

本論文に入るにあたって、1点述べておかなければならない。軍事用語の訳についてである。ポーランド語の軍事用語は、日本語訳が定まっていないものが大半である。また私に軍事の専門知識が足りず、適切な訳ができていない可能性がある。そのため、不安が残る単語については、ポーランド語を一緒に表記した。

本論文を通して、フサリアがどのような活躍をしたのか、また、ポーランド文化の中でどのように捉えられているのか、その象徴性を探りたいと思う。

## 第一章 フサリアの基本事項

### 1. フサリアとは

フサリアとは、14～18世紀に活躍したポーランドの重騎兵部隊である。フサリアの語源はハンガリー語の *huszár* (驃騎兵、軽騎兵) である。一般に、重騎兵とは鎧兜、胴あてなど、全身を鎧などで覆い、馬上から槍や刀剣類を使用して攻撃をする兵士のことである。フサリア(*husaria*)は集合名詞であり、一人の騎兵はフサシュ(*husarz*)(図1)という。フサリアはその装飾の特殊性と数々の戦いにおいて勝利に貢献したことから、ポーランドの無敵な力の象徴と成っている。

ポーランド貴族であるシュラフタの子息がフサリアになった。その階級は大佐(プウコヴニク *pułkownik*)、騎兵隊長または大尉(ロトミストウシュ *rotmistrz*)、大尉(ポルチュニク *porucznik*)、旗手(ホロンジ *chorąży*)(図2)、指揮官代理(ナミエストニク *namiestnik*)、騎兵士官(トヴァジシュ *towarzysz*)である。大半が騎兵士官であった。これらの階級の上に軍の最高司令官であるヘトマン(*hetman*)<sup>1</sup>がいて、ヘトマンが全体的な指揮をした。王族がフサリアの指揮を執ることもあった。フサリア部隊の下に、ポーランド軍の最小単位であるポチェット(*poczet*)が付いた。装備の簡単な軽騎兵や重軽騎兵がポチェットに属した。ポチェット兵はフサリアやフサリアに次ぐ地位であるパンツェルニ(*pancerni*)という騎兵の後方を守った。



図1 『ヘトマンの哨兵』 *Straż hetmańska*, Waclaw Pawlitzak 画



図2 騎手

<sup>1</sup> 1569年ルブリン合同によってポーランドとリトアニアの王朝が合同したが、中央官職、軍、財政は別個であった。そのためポーランド王国軍(王冠領軍)とリトアニア大公国軍があった。そのそれぞれの最高司令官がヘトマンである。ヘトマンは大ヘトマン(*wielki hetman koronny / litewski*)と野戦ヘトマン(*polny hetman koronny / litewski*)があり、大ヘトマンは野戦ヘトマンより位が高かった。

## 2. フサリアの誕生から消滅まで

\*年表1参照

フサリアの起源はセルビアにある。1389年セルビア人はコソヴォでトルコ人に敗れた。彼らは敗北した後、祖国を追われハンガリーに入った。ハンガリーで彼らは傭兵騎兵となりラツオーヴィエ(racowie)と呼ばれるようになった。ハンガリー王マーチャーシュ1世<sup>2</sup>はラツオーヴィエから軽騎兵隊を組織した。王の死後、ラツオーヴィエは世界中に広がり、ポーランドにも入った。ハンガリーを中心に各国のラツオーヴィエを手本とした騎兵は一時重騎兵となるものの、その後は軽騎兵となっていった。それとは異なり、ポーランドの騎兵フサリアは軽騎兵から重騎兵になり、その後再び軽騎兵に戻ることはなかった。この騎兵が14~18世紀の間フサリアと呼ばれていたのである。ポーランドに入ってきた当初は、木製の盾と軽い鎧兜、木製の軽い槍しか装備しなかったが、その後鉄の装備を基本とするようになる。全身を鉄の鎧で包み、フサリアの特徴の一つである4.5~5.5メートルの長い槍を持ち、背に翼を持った。

1503年、セイム sejm(国会)が初めてフサリア部隊を召集する。このときはまだフサリアとして分化されていなかった。勝利した戦いの中でも1514年オルシャの戦い<sup>3</sup>、1605年キルホルムの戦い<sup>4</sup>、1610年クウシンの戦い<sup>5</sup>、1621年ホチムの戦い<sup>6</sup>は大勝利を収め、現在のポーランドにおいても大変有名である。

1514年のオルシャの戦いの時は槍使いの重騎兵が中心であり、フサリアが軍の主力となるのは16世紀後半になってからである。それがはじめて顕著になったのはグダンスクとの戦い、1577年ルビエシュヴォの戦い<sup>7</sup>である。この戦いではフサリアが騎兵の主力であった。この戦いの後、当時ポーランド王であったハンガリー出身のステファン・バトーリ<sup>8</sup>はフサリアの必要性を十分に理解し、ポーランド軍の騎兵の中にフサリア部隊を新しく設置した。このときにフサリアの基本形が出来上がり、1598年フサリア部隊からフサシュ以外のものが除外され、純粋なフサリア部隊となった。

17世紀前半がフサリアの絶頂期だった。ポーランド＝リトアニア共和国軍が勝利を飾った1605年キルホルムの戦い、1610年クウシンの戦い、1621年ホチムの戦いもこの時期である。17世紀後半になるとフサリア衰退の兆候が見られるようになる。17世紀後半以降フ

---

<sup>2</sup> Maciej Korwin (hu. Hunyadi Mátyás) (1443–1490、ハンガリー王在位：1458–1490、ボヘミア王在位：1496–1490) フニャディ・マーチャーシュ、マティアス・コルヴィヌスとも呼ばれる。1479年にはオーストリア大公国の支配権も得る。王軍を常備軍として設置し、中央集権化を進めて、中世ハンガリーの最盛期を築いた。ルネサンス文化を奨励したことで知られる。

<sup>3</sup> Bitwa pod Orszą

<sup>4</sup> Bitwa pod Kircholmem

<sup>5</sup> Bitwa pod Kluszyńem

<sup>6</sup> Bitwa pod Chocimiem

<sup>7</sup> Bitwa pod Lubiszewem

<sup>8</sup> Stefan Batory (1533-1586、在位 1576-1686) 1571年からトランシルヴァニア公、1576年ジグムント1世スターリ(Zygmunt I Stary)の娘アンナ・ヤギェロンカ(Anna Jagiellonka)との結婚後、ポーランド国王、リトアニア大公となる。多くの歴史家から最も優れた選挙王と評価されている。

サシュの数が激減した。原因の一つとして、フサリアの維持費が挙げられる。鎧、翼、槍といった装備、よく訓練された馬を所有、維持できるのは裕福なシュラフタに限られた。維持費の問題から、フサリアに入隊できる人数が自然と制限されるようになってしまった。農業とシュラフタの経済活動が活発だった 16 世紀から 17 世紀前半は、フサリアの数は大変多かった。共和国の経済が絶頂だった 17 世紀初めには、ポーランド軍内のフサシュの数は 8000 人に達した。1648～1667 年のウクライナ・コサックの反乱とスウェーデンの侵攻でポーランド国内は危機に陥った。シュラフタ経済の衰退はフサリア存続の危機をもたらした。1652 年～1660 年、ポーランド軍は軍の最高水準を保持するために努力をしたにも関わらず、フサシュの数は全盛期の 8 分の 1 である 1000 騎あまりに減少してしまった。

ポーランドを荒らしたスウェーデンとの戦いが終息に向かい、国内農業の復活と共にシュラフタの経済は復活してきた。それに伴ってフサシュの数は少しずつ上昇し、1680 年代には 3000 騎に達した。しかしそれは絶頂期のフサリアとは質が異なった。フサリアの規模を維持するために、フサリアよりも地位の低いパンツェルニをフサリア部隊に編成したことが原因の一つである。そのほかの原因として、先のコサックやスウェーデンとの戦いで訓練が行き届いた馬を大量に失ったことや、経済的理由から軽騎兵が装備するような粗末なものをフサリアが装備するようになってしまったことが挙げられる。18 世紀が近づくとシュラフタは軍事よりも政治を重視するようになり、騎兵の訓練を怠るようになる。それが技能の急激な低下を招いた。

最終的にフサリアは指揮官や王などの権力者、シュラフタの葬式のみで登場するようになってしまった。そうした儀式に際して、全身を鎧に包んだフサシュが教会に入り、亡くなったシュラフタの棺台で槍を粉々にする、という慣習があった。18 世紀からフサリアは葬式部隊と呼ばれるようになった。1775 年セイムは戦闘部隊としてのフサリアを廃止し、フサリアは消滅する。

年表 1 \*備考の○が勝者、●が敗者

年		備考	
1389	コソヴォの戦いでセルビア王国がオスマン帝国に敗れる		
1490 ごろ	ハンガリー王マーチャーシュ 1 世死後、ラツォーヴィエがポーランドに入る		
1503	セイムがはじめてフサリア部隊を召集——ポーランド・フサリアの誕生		
1514	オルシャの戦い(Bitwa pod Orszą)	○共和国 騎兵 2 万、歩兵 6 千	●モスクワ大公国 騎兵 7 万
1531	オベルティンの戦い(Bitwa pod Obertynem)	○共和国 騎兵 4452、歩兵 1167、部隊 12	●モルダヴィア公国 軽騎兵 17000、部隊 50
1577	ルビシェヴォの戦い (Bitwa pod Lubiszewem)	○共和国 騎兵 1200、歩兵 730	●グダンスク 騎兵 400、軽騎兵 400、歩兵備兵 3100、民間兵 6000—8000、
1588	ビチナの戦い(Bitwa pod Byczyną)	○共和国 騎兵 3700 歩兵 2300	●オーストリア大公国 兵 6500
1598	フサリア部隊がフサシュだけから構成されるようになる		
1600	クルテア・ドウ・アルゲシュの戦い(Bitwa pod Curtea de Argesz)	○共和国 兵 1450(内フサシュ 950)	●ワラキア公国 兵 7000
1601	コウケンハウゼンの戦い (Bitwa pod Kokenhausen)	○共和国 兵 3000、部隊 9	●スウェーデン王国 兵 5000、部隊 17
1605	キルホルムの戦い(Bitwa pod Kircholmem)	○共和国 騎兵 2400(内フサシュ 1750)、歩兵 1040、部隊 4~7	●スウェーデン王国 騎兵 2500、歩兵 8500、部隊 11
1610	クウシンの戦い(Bitwa pod Kłuszynem)	○共和国 騎兵 6556(内フサシュ 5556)、歩兵 200、	●モスクワ大公国 兵 35000~40000
1621	ホチムの戦い(Bitwa pod Chocimiem)	○共和国 兵 46000~50000、部	●オスマン帝国、クリミア・ハン国、モ

		隊 28～50	ルダヴィア公国、ワラキア公国 兵 100000～150000、 部隊 100
1629	トシチャノの戦い(Bitwa pod Trzcianą)	○共和国 フサリア 1300、軽騎 兵 3200、	●スウェーデン王国 騎兵 4000、歩兵 5000
1624	マルティノフの戦い (Bitwa pod Martynowem)	○共和国 騎兵 4650、歩兵 350	●クリミア・ハン国 不明
1644	オフマトフの戦い(Bitwa pod Ochmatowem)	○共和国 兵 19000(常備軍、コ サック、私軍)	●クリミア・ハン国 兵 20000
1648-1655	フミエルニツキの反乱 (Powstanie Chmielnickiego)	○共和国	●ウクライナ・コサ ック
1655-1660	大洪水(Potop szwedzki)	○共和国	●スウェーデン王国
1673	ホチムの戦い(Bitwa pod Chocimiem)	○共和国、ワラキア 公国 兵 30000	●オスマン帝国 兵 35000
1675	ルヴフの戦い(Bitwa pod Lwowem)	○共和国 兵 6000(内半数が歩 兵)	●クリミア・ハン国 兵 10000
1675	ウィーンの戦い(Bitwa pod Wiedniem)	○共和国、オースト リア、ザクセン、フ ランケン・クライ ス、シュヴァーベ ン、バイエルン 兵 70000	●オスマン帝国、ク リミア・ハン国、ワ ラキア公国、モルダ ヴィア公国、トラン シルヴァニア 兵 138000
18 世紀前半	“葬式部隊”して使用される		
1775	セイムによりフサリアが廃止される		

### 3. フサリアが活躍した戦い

17 世紀には対外戦争が多く行われた。ポーランド軍の主力であったフサリアは 17 世紀のポーランドが行った大きな戦いに参加した。以下でフサリアが活躍した戦いを取り上げる。

#### a) キルホルムの戦い(Bitwa pod Kircholmem) (1605) (図 3、4)

交戦国：ポーランド＝リトアニア共和国 対 スウェーデン王国

原因：スウェーデン王位と宗派に関する問題

スウェーデン王ヨハン 3 世<sup>9</sup>はポーランド王との同盟を画策し、ポーランドのヤギェウォ家と婚姻関係を結んだ。1566年に誕生したヨハン 3 世の子ジグムントは、1587年にポーランド王ジグムント 3 世として即位する。ジグムントは、カトリックに改宗しており、プロテスタント国家であるスウェーデンとは相容れず、スウェーデンの継承問題にも影を落とすようになった。ジグムントの叔父であるカール(のちのスウェーデン王カール 9 世<sup>10</sup>)はプロテスタントで、スウェーデン国内の反カトリック勢力の支持を得た。1592年にヨハン 3 世が死去すると、ポーランド王ジグムント 3 世がスウェーデン王位を継承した。スウェーデンではカトリックに改宗したジグムントに対する反感が高まり、カールが反カトリック勢力のリーダーになった。カールはスウェーデン国王の代行として事実上のスウェーデンの統治者となった。1598年、ジグムント 3 世はスウェーデンに上陸し、カールの統治権を剥奪した。カールは反乱軍を組織し、両軍は戦闘を行った。カールはジグムント 3 世を破り、スウェーデンから追放し、スウェーデン王位を剥奪した。以後、1629年のスウェーデン・ポーランド戦争終結まで、ジグムント 3 世はスウェーデンの王位を要求し続け、常に対決姿勢を崩さなかった。その戦いのひとつがキルホルムの戦いである。

場所：キルホルム(ラトヴィアにある小さな村)周辺

兵力：

- ・連合軍(ヤン・ホトキューヴィチ<sup>11</sup>率いるリトアニア大公軍中心)
  - 歩兵 1300 人(うち槍を持った兵 1040、マスカット銃<sup>12</sup>を持った兵 260)
  - 騎兵 2600 人(うちフサシュ 1750 騎)
  - カノン砲 4 基
- ・スウェーデン軍(指揮官スウェーデン王カール 9 世)
  - 歩兵 10000 人(うち槍兵 7500 人、マスカット銃兵 2500 人)
  - 騎兵 2500 人
  - カノン砲 11 基

<sup>9</sup> Jan III Waza (1537-1592、スウェーデン王在位 1569-1592)ポーランド王ジグムント 3 世の父、スウェーデン王カール 9 世の兄。

<sup>10</sup> Karol IX Waza (1550-1611、摂政 1599-1604、スウェーデン王在位 1604-1660) ポーランド王ジグムント 3 世の叔父。1604 年、正式にスウェーデン王カール 9 世として戴冠した。

<sup>11</sup> Jan Karol Chodkiewicz (1560-1621) 1600 年よりリトアニアの野戦ヘトマン、1605 年よりリトアニアの大ヘトマンを歴任。17 世紀に活躍したヨーロッパで最も有能な指揮官の一人。

<sup>12</sup> 先込め式の歩兵銃。初期のマスカットは点火機構が火縄式だった。17 世紀後半にフリントロック式の点火機構が発明されるとコスト低下や信頼性向上などの理由でこれが主流となった。さらに紙薬莢の発明で銃の射撃間隔は短くなり、フランスで銃剣が発明されて槍の機能も兼ねるようになり射撃時以外の防御力を高めるとマスカット銃は軍隊整備の主力となった。

勝敗：ポーランド=リトアニア共和国勝利

戦闘内容：

共和国軍指揮官ホトキューヴィチはスウェーデン軍をおびき出そうとし、陽動作戦を実行した。スウェーデン軍は共和国軍が撤退し始めたと思い、追いかけるために進軍した。しかしそのスウェーデン軍の行動はホトキューヴィチが待ち望んでいたことだった。進軍するために散らばったスウェーデン軍に向かって共和国軍の歩兵が射撃した。そして、まずスウェーデン軍左翼に突撃し、同時に 300 騎のフサリアが中央に突撃、続いて共和国軍の左翼に控えていた兵とフサリアがスウェーデン軍右翼を攻撃した。スウェーデン軍はパニックに陥り、20～30 分で壊滅的な状況となり、ポーランド軍の勝利が確定した。

#### b) クウシンの戦い(Bitwa pod Kluszyнем) (1610) (図 5)

交戦国：ポーランド=リトアニア連合軍 対 ロシア軍

原因：ロシアのツァーリ継承問題に対する共和国の干渉

リューリク王朝断絶後、ロシアではボリス・ゴドゥノフ<sup>13</sup>が帝位に就いていたが、殺されたはずのイヴァン 4 世の息子ドミートリーを名乗る男がポーランド・リトアニア共和国に出現した。ポーランドのマグナート、ヴィシニョヴィエツキ家<sup>14</sup>やサンドミェシュ県知事イエジィ・ムニェフらがこの僭称者の後ろ盾となった。1604 年、偽ドミートリーはカトリックに改宗し、イエズス会とジグムント 3 世の了解のもとモスクワに侵攻、翌年ゴドゥノフの死後、ツァーリの位に就いた。ポーランド人の介入は反乱を招き、1606 年偽ドミートリーは殺害され、ヴァシーリー・シュイスキー<sup>15</sup>がツァーリに即位した。1607 年、殺害されたはずの偽ドミートリーを名乗る男が現れ、シュラフタの支援を受け、モスクワに迫った。これに対しシュイスキーが 1609 年にスウェーデンと同盟を結ぶと、ジグムント 3 世はモスクワ遠征を決意

<sup>13</sup> Borys Godunow (1550-1605、モスクワ大公国ツァーリ在位 1598-1605) 祖先は 14 世紀にモスクワ大公国に臣従したタタールといわれる。イヴァン 4 世の寵臣マリユータ・スクラートフの娘マリヤと結婚したことにより、権勢を得る。有能な顧問官としてイヴァン 4 世の信頼が厚かった。1591 年、後継者のドミートリーが謎の死を遂げると、ボリスが死因調査を命じたヴァシーリー・シュイスキー公は事故死と判断した。ツァーリの座を狙うボリスの仕業だという噂がまことしやかに語られた。リューリク王朝は断絶し、国内は疫病、災害、経済不況等により混乱し、「動乱」時代となった。

<sup>14</sup> Wiśniowieccy ポーランド=リトアニア連合王国のマグナート。ウクライナの広大な領地を所有し、王国内でも有数なマグナートで、影響力が強かった。ポーランド王ミハウ・コルヴェット・ヴィシニョヴィエツキ、イエレミ・ヴィシニョヴィエツキを輩出した。

<sup>15</sup> Wasył IV Szujski (1552-1612、モスクワ大公国ツァーリ在位 1602-1610) ヴァシーリー 4 世とも呼ばれる。動乱期の短命な統治者の一人。モスクワ大公家の傍流に当たる大貴族シュイスキー家の出身。1605 年 4 月にボリス・ゴドゥノフが死ぬと、ドミートリーの母マリヤ・ナガヤともども偽ドミートリー 1 世を本物の王子と認めて、前言を翻した。モスクワに迎えられた偽ドミートリー 1 世が大貴族や民衆の人気を急速に失っていくと、今度は彼を偽物と糾弾し始める。翌 1606 年 5 月、シュイスキーは他の大貴族の支持を取り付けて、偽ドミートリー 1 世を廃位・殺害。直後に支持者によってツァーリに選出された。

した。それがクウシンの戦いである。<sup>16</sup>  
場所：クウシン(スモレンスク周辺の村)

兵力：

・共和国軍(指揮官スタニスワフ・ジュウキェフスキ<sup>17</sup>)

歩兵 200 人

騎兵 6556 人(うちフサシュ 5556 騎)

カノン砲 2 基

・ロシア軍(指揮官ロシア王子ドミートリー・シュイスキー<sup>18</sup>)

歩兵 35000-40000 人(うちフィンランド人とスウェーデン人傭兵 5000~10000 人)

カノン砲 11 基

勝敗：ポーランド=リトアニア共和国

戦闘内容：

スモレンスクに向かう途中のロシア軍の進軍をポーランド軍が妨害した。ロシア軍は共和国軍のフサリアの突撃を防ぐために、戦場に高い柵を設置した。フサリアは自分たちよりもはるかに多い敵を倒すためにおよそ 8~10 回突撃を行った。

そうした中、ロシア軍の中に外国人傭兵がポーランド軍に寝返っているという噂が流れ始め、ロシア軍の士気やまとまりがなくなってきた。そしてロシア軍の主力はポーランド軍によって打ち負かされた。他のロシア軍や外国部隊は抵抗を続けながら、なんとか撤退を試みた。一方ポーランド軍も戦場までの長い行進と激しい戦いでかなり疲弊していた。

ジュウキェフスキはロシア軍との交渉に挑み、成功した。ロシア軍の外国人傭兵はポーランド軍に降伏し、今後ロシアの対共和国戦には参加しないことを約束し、数百の傭兵がポーランド軍に仕えることを選択した。

### c) ホチムの戦い(Bitwa pod Chocimiem) (1621) (図 6)

交戦国：ポーランド=リトアニア共和国軍、ウクライナ・コサック

対

オスマン帝国、クリミア・ハン国、モルダヴィア公国<sup>19</sup>、ワラキア王国<sup>20</sup>

原因：ポーランド=リトアニア共和国にまで達するオスマン帝国の膨張拡大とオスマン帝国

<sup>16</sup> 参考文献(13)、136-137 頁に拠った。

<sup>17</sup> Stanisław Żółkiewski (1547-1620) ポーランド・リトアニア共和国のマグナートで、軍事指導者として共和国の南部・東部国境での数多くの戦いを指揮した。1588 年より王冠領野戦ヘトマン、1590 年よりリヴィウ城代、1618 年より王冠領大ヘトマンおよび王冠領宰相など歴任。

<sup>18</sup> Dymitr Szujski (?-1612) ヴァシーリー・シュイスキーの弟。

<sup>19</sup> 現在のルーマニアの東北部。

<sup>20</sup> 現在のルーマニア首都ブカレストのある地域。14 世紀に建国された。14 世紀末期にはオスマン帝国の属国となった。

## 領内へのコサックの度重なる侵入

ジグムント・アウグストとステファン・バトーリは共和国の防衛にコサックの組織化された軍事力を利用しようとしていた。コサックのうち、あるものは特別名簿に登録された「登録コサック」として軍役に入った。彼らは戦利品や略奪品を求めてオスマンのガレー船を奪い、黒海沿岸のオスマン帝国領内に侵入した。コサックがヴァルナの町に侵入・略奪したことはオスマン帝国に侮辱を加えた。これに対し、当時好戦的なスルタン、オスマン 2 世<sup>21</sup>が支配していたオスマン帝国は、1533 年に締結した「永久平和」を放棄し、戦争に乗り出した。

コサックのオスマン帝国領内への侵入だけでなく、当時オスマン帝国の属国、または友好関係国であったドナウ河流域諸国、ハンガリー王国、モルダヴィア公国、ワラキア公国に対してポーランドが関心をもち、ポーランドに友好的な候補者をこれらの国の王位に据えようとしたことも、ポーランド・トルコ間の関係悪化に影響した。<sup>22</sup>

場所：ポドレ(西ウクライナに位置する歴史的地名)

兵力：

・ポーランド=リトアニア共和国軍(指揮官ヤン・カロール・ホトキューヴィチ、ポーランド王子ヴワディスワフ・ヴァザ<sup>23</sup>、コサック首領ピョートル・コナシェヴィッチ=サハイダチュニ<sup>24</sup>)

歩兵 12000 人

騎兵 18000 人

ウクライナ・コサック 25000- 30000 人

カノン砲 28- 50 基

・オスマン帝国軍(指揮官オスマン帝国スルタン、オスマン 2 世)

兵 100000- 150000 人(4 分の 1 はタタール人、モルダヴィア人、ワラキア人)

カノン砲 100 基

勝敗：ポーランド=リトアニア共和国軍勝利

戦闘内容：

8 月 27 日ウクライナ・コサック騎兵隊は、オスマン帝国軍の到着を遅らせるために襲撃を決行した。オスマン帝国側もコサックを共和国軍から切り離そうと懸命に戦った。

9 月 2 日にはオスマン帝国軍はホチムに到着した。9 月 7 日までオスマン軍は何度も攻撃

<sup>21</sup> Osman II (1604-1622、オスマン帝国第 16 代皇帝在位 1618-1622) 14 歳の若さで皇帝の座に即いた。改革に力を入れ、特に現存するイエニチェリを改革するべく、軍人達の意向を無視し新しい軍隊編成を取り入れる計画を立てたが、それを知った軍人によって、実行される前に暗殺された。

<sup>22</sup> 参考文献(12)、217~220 頁に拠った。

<sup>23</sup> Władysław IV Waza (1595-1648、ポーランド王在位 1632-1648) ジグムント 3 世の息子。

<sup>24</sup> Piotr Konaszewicz-Sahajdaczny (1570-1622) 貴族出身で、17 世紀初めにウクライナ・コサックの大長官を務めた。クリミア汗国、オスマン帝国、ロシア・ツァーリ国の軍勢と度々戦った。ウクライナの国民的英雄。

をしたが、共和国軍の大規模なフサリアと経験豊富な砲兵隊にはばまれ失敗に終わった。帝国軍は共和国軍を包囲することで、共和国軍の兵站線を断とうとした。ポーランドの守備兵は士気を失うことはなかったが、徐々に食料や補給品が不足していった。その包囲の中、大ヘトマンだったホトキューヴィチが病気のため亡くなり、彼の補佐だったスタニスワフ・ルボミルスキが指揮を執ることになった。戦いで疲弊したトルコ人はそれを知らず、1621年休戦を申し出てポーランドとの国境まで撤退した。戦いはポーランドに有利な講和条約で終結した。



図3 『キルホルムの戦い』 *Bitwa pod Kircholmem*, Pieter Snayers 画



図4 『キルホルムの戦い』 *Bitwa pod Kircholmem*, January Suchodolski 画



図5 『クウシンの戦い』 *Bitwa pod Kluszyнем*, Szymon Boguszowicz 画



図6 『ホチムの戦い』 *Bitwa pod Chocimiem*, Józef Brandt 画

#### 4. フサリアの装備品

フサリアの特徴の一つに、その装備品が挙げられる。ポーランド国内の他の兵や、国外の騎士に類を見ない装備(図7)は、フサリアの存在を際立たせているといえるだろう。装備品は見た目の豪華絢爛さ、荘厳さだけでなく、実際の戦いにおいて重要な役割を負った。特に特徴的な翼はフサリアの象徴といえる。戦いの中では、突撃の際に発する風を切る音や、その存在感が敵の恐怖心をあおり、精神的ダメージを与えたと考えられる。以下、幾つかのフサリアの装備品を取り上げる。

##### ・羽根飾り

フサリアの装備としての羽根には、鷲の羽が多く使用された。その次に多かったのが隼や鷹のものである。ときにはカラスやアヒルのものが使用された。手に入れにくく、価値の高いものほどフサリアの装飾に使われた。この羽根をシシヤクと呼ばれる兜や槍の先端部分、盾、馬の脚、翼などにつけていたが、フサリアが発達するにつれてシシヤクと翼にだけ装備されるようになった。

##### ・翼

翼は1枚または2枚から成り、馬の鞍の部分に取り付けられた。ポーランド人の中には鎧の背中部分にくくりつけられていると思っている人も多いようだが、実際には馬の鞍につけ、戦闘が終わったら取り外して鞍に置くという場合もあった。

この翼は何の目的をもって使用されたのかはあまりはっきりしていない。一般に言われていることの一つは、閲兵式の装飾品としての機能である。豪華絢爛な衣服と行進用の馬具に加えて装着された。頻繁に使うと早くに痛んでしまうので、日常的に使用することはなく、また戦闘時、天気が悪いときや厳しい地形では、翼は装着せず荷台に置いておいた、という記述もある。一般に言われている翼の用途の二つ目は、敵の馬を怖がらせる役割である。フサリアが敵に向かって強襲を仕掛ける時に、その外観によって敵軍に恐怖を与えた。翼が突撃の際に大きな音を出すというイメージがあるが、実際大きな音を発したかどうかは定かではない。翼を装着して疾走しても何の音も発しなかったという証言も存在する。資料が無いため翼が音を発さなかったと証明することはできないが、翼が音を発するというイメージは、史実というよりも想像が先行したものなのであろう。また、全てのフサリアが翼を装備したわけではない。フサリアの翼が有名になったのは19世紀画家のヤン・マテイコやヴォイチェフ・コサックがフサリアを描くときに翼をつけて表現したので、それがフサリアのイメージとして定着した。

##### ・毛皮

野生動物の皮もフサリアの装飾品として特徴的である。防面での役割はほとんどなく、装飾のためにつけられたものである。大体が虎や豹の皮で、他にも狼や熊の皮を使用する

ときもあった。権力を誇示するために装備された。



図7フサシュの装備

## 5. フサリアの戦闘方法

フサリアはトルコやタタールなどの東方と西欧の両方の騎兵の特徴を併せ持っていた。東方の騎兵の勢いや積極性と、西欧の騎兵のもつ軍隊の密集性の両方が備わっていた。フサリア特有であった長い槍と、突撃をする際に瞬時に実行することができる隊列の拡散・密集の技能がフサリアの強さのもとだった。

フサリアは突撃・強襲を強みとしていたが、それに伴う死傷者は非常に少なかった。敵兵が何千人と死ぬなか、フサリアはわずか数百の被害ですむことが多々あった。敵軍の歩兵による一斉射撃に対して、突撃は各列 3メートルぐらいの間隔をもち、散らばった状態で突撃を行ったので、射撃が当たる確率はかなり低かった。一方、敵軍に接近すると間隔を狭め、密集状態で突撃を行った。このような攻撃を食い止める方法として、敵軍は垣根や柵を使用した。密集したフサリア軍によって突破されてしまった。敵の砲撃が命中したとしても、馬に当たることが多く、騎兵自身は無事な場合が多かった。馬が砲撃を食らった時、フサリアの群れの中に隠れ、次の突撃まで待機した。

こういったフサリアの攻撃は、西欧のマスケット銃などの火器を中心とした攻撃や東方の騎兵による攻撃の両方に対応することができたため、強力な騎兵隊としてポーランド軍の中で大いに活躍をした。(図8、9)



図8 フサリアの突撃 (『キルホルム』 *Kirholm*, Wojciech Kossak 画)



図9 フサリアの突撃2 (『大尉ミェウジンスキ、ウィーンのヤン3世の御前にフサリア部隊を連れ来たる』 *Rotmistrz Mielżyński przyprawdza Janowi III chorągiew husarską pod Wiedeń*, Wojciech Kossak 画)

## 第二章 教育におけるフサリアの描写

ポーランドにおいてフサリアはポーランド黄金期、栄光、勝利の象徴として絵画や文学、映画などで描かれている。象徴としてのフサリアの姿が形成される際に文学、芸術、映画等が大きく関係するが、人々の知識やイメージの基礎を作るのは幼少期に受けた教育である。本章では、その教育を取り上げたい。ポーランドの小学校 6 年生用の教科書『歴史 6、栄光と衰退の中のポーランド(14～18 世紀)』 „*HISTORIA 6; Polska w latach świetności i upadku (XIV-XVIII w)*” と参考書『ピョートル君のためのポーランドの歴史』 „*Historia Polska dla Piotrka*” を使い、ポーランドの学校において、歴史の授業でどのような内容を教えているのか、またその中でフサリアがどのように扱われているのかを考察したい。特にフサリアが活躍した 17 世紀のポーランドと諸外国の戦いを扱っている項目を取り上げ、教科書と参考書の内容を比較検討し、フサリアの他、ポーランド王、ヘトマン、敵の描かれ方等にも注目しながら、ポーランド人のフサリアに関する知識とイメージの土台がどのように形成されているのか考察したい。

なお、各論の項目において、「概要」では教科書と参考書に即した内容を記し、「考察」では私なりの解釈を交えながら論じていく。

### 1. トルコとの戦い①——ツェツォラの戦い(1620)、ホチムの戦い(1621)

#### 概要

##### a) ツェツォラの戦い

当時トルコはその勢力を拡大し、ヨーロッパ、特にポーランドとオーストリアにとって脅威であった。トルコに従属していたタタール人は何度かポーランド南方を攻撃している。

トルコとの戦いの発端は主に二つである。一つ目はポーランドに従属していたウクライナのコサックがトルコに対し略奪行為を行っていたことである。もともと荒っぽいコサックはトルコに遠征し、町を襲撃し、略奪行為をした。その行為はトルコの首都イスタンブール近郊の街にも及んだ。トルコのスルタンはたびたびポーランド王にコサックを抑えるよう要請している。もう一つの原因は、ポーランドがモルダヴィア公国<sup>25</sup>の公位にポーランド王の血縁者を据えようとしたことであった。当時モルダヴィア公国は隣国のトランシルヴァニアと同様にトルコの支配下に置かれていた。1600 年ごろこれらの国々は独立したものの、以前と変わらずトルコに従属していたので、名目上の独立であった。

<sup>25</sup> カルパティア山脈の東、プラト川の西で両者に挟まれた地域、またはルーマニア領を越えてプラト川の東にあるドニエプル川を西限とするベッサラビア地方を含めた、さらに広い地域を指す。14 世紀にルーマニア人が建国。16 世紀初頭にオスマン帝国の属国となり、自治を認められていた。現在はルーマニア領、モルドバ領、ウクライナ領に分かれている。

1620年、トルコのスルタンのポーランドに対する宣戦布告によって戦いが始まった(ツェツォラ<sup>26</sup>の戦い)。トルコの巨大な軍に対抗してポーランドは8000人の隊しか編成することができなかった。70歳を越えるヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキがポーランド軍の指揮を執った。彼は軍をモルドヴァの奥へ派遣し、プルト川<sup>27</sup>のほとりに陣営を組んだ。そうすることによって、トルコとタタールの遠征を押し留めようとしたのだ。陣営前の平原で戦いが行われ、持久戦に持ち込まれた。ポーランド軍はモルダヴィア公国大公の援助を期待したが、大公がトルコ寄りだということが判明した。結果として、戦はポーランド軍の敗北に終わった。陣営を維持することができなかったため、ジュウキェフスキはポーランド=リトアニア共和国の国境内に戻らなければならなくなった。退却時の危険を感じたヘトマンは、荷馬車を鎖でつなぎ、列を作るよう命じた。荷馬車同士を繋げることで守りを固め、国境のポーランド側まで兵を運んだ。途中でトルコ人が荷馬車の隊列を断ち切ったことで、ポーランド軍の退却は逃走へと変わり、兵はパニックに陥った。ヘトマンは戦死し、ポーランドは敗北した。

#### b)ホチムの戦い

ツェツォラの戦いの後、ポーランドでは人が集められ、軍隊の準備が整った。先の戦いから1年後、スルタンがトルコの大軍を率いて、再びポーランドを襲撃した(ホチム<sup>28</sup>の戦い)。ポーランド軍はホチム要塞に陣営を組み、ドニエストル川<sup>29</sup>のほとりでトルコ軍を待ち受けた。ヘトマン、ヤン・カロール・ホトキェーヴィチ<sup>30</sup>が3万5千のポーランド軍の先頭に立った。アタマン<sup>31</sup>、コナシェヴィッチ=サハイダチュニ<sup>32</sup>の指揮の下、コサックがポーランドを援護に駆けつけた。コサックの援軍を足してもトルコ軍の方がかなり多かった。数週間にわたって、トルコ軍はホチム陣営を包囲し攻撃した。ポーランドの守備隊は、降伏の要求を受け入れることなく抵抗し続けた。包囲時に、ホトキェーヴィチが亡くなったが、戦いで疲れたトルコ人はそれを知らず、1621年休戦を申し出てポーランドとの国境まで撤退した。戦いはポーランドに有利な講和条約で終結した。

<sup>26</sup> Cecora 現在のルーマニア北東部にある街。

<sup>27</sup> ウクライナ領内から流れ出し、ドナウ川に合流する。ルーマニアとモルドバの境界をなす。

<sup>28</sup> Chocim ウクライナの南西部、ドニエステル川のほとりにある。

<sup>29</sup> ウクライナ西端を発し、モルドバ共和国と南ブジャク地方を貫流し、黒海に注ぐ河川。

<sup>30</sup> Jan Karol Chodkiewicz (1560-1621) 1600年よりリトアニア領野戦ヘトマン、1605年よりリトアニア領大ヘトマン、1616年よりヴィルノ県知事など歴任。

<sup>31</sup> コサック共同体で選出される指導者の称号。ウクライナ・コサックのザポロージェのコサックでは、軍事・政治組織シーチの政府であるキーシュの頭に相当し、キーシュのオタマンと呼ばれていた。

<sup>32</sup> Petro(Piotr) Konaszewicz-Sahajdaczny (1570-1622) 貴族出身で、17世紀初めにウクライナ・コサックの大長官を務めた。クリミア汗国、オスマン帝国、ロシア・ツァーリ国の軍勢と度々戦った。ウクライナの国民的英雄。



地図1 HISTORIA 6 s. 106

### 考察

教科書と参考書に共通することがある。それは、数少ないポーランド軍がトルコの強大な大軍に立ち向かった、という記述である。これは1620年ツェツォラの戦い、1621年ホチムの戦いに限られたことではない。同じように、スウェーデンの「大洪水」や2度目のトルコとの対戦、ホチムの戦い(1672年)でも、数を対比させて記述している。しかも、トルコ軍の数は明記せず、「巨大なトルコ軍 ogromna armia turecka(HISTORIA 6)」、「強大なトルコ軍 potężna armia turecka(Historia Polska dla Piotrka)」と描写している。一方ポーランド軍に関して、ツェツォラの戦いでは、「たった8000の軍隊 tylko 8 tys. wojska(HISTORIA6)」、「あまり数多くない軍隊 nieliczne wojsko(Historia Polska dla Piotrka)」と書いている。これは数が極端に違ったことを表わし、ポーランドの軍隊は熟練した技術をもつ精鋭部隊である、ということを示唆していると思われる。ポーランド人は大軍に向かっていった勇敢さと軍の技術の高さを誇りに思っているのだろう。

教科書と参考書の描写の違いの中で面白いものは、ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキに関する記述である。教科書では次のように書かれている。

「ツェツォラでの敗北の後、荷馬車を鎖で繋げることで隊列を守りながら撤退していたポーランド軍は、道中トルコ軍の襲撃を受ける。パニックに陥り逃走し始め

た兵士たちを見たジュウキェフスキは、逃走して助かることは無い、ということを示すために、自分の馬をサーベルで突き刺し、自ら戦場から逃げられないようにした。ヘトマンは最後まで勇ましく戦い、馬上から落ちた。(HISTORIA 6 s. 100- 101、訳・要約八木)」

教科書にはこのような内容のほか、ヴィトルト・ピヴニツキ<sup>33</sup>の絵画『1620年ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキの死』 *Śmierć hetmana Stanisława Żółkiewskiego* (図 10)を載せている。その絵の説明は以下の通りである。

「共和国の大ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキは優れた指導者であり愛国者であった。彼はそのふるまいからシュラフタと自分の兵の素晴らしい見本となった。ロシアやトルコ、タタールとの戦いに多く参加した。1620年、気が動転し逃走した他の兵士のように降伏することはなく、ホチムで亡くなった。(HISTORIA 6 s.100、訳八木)」

一方参考書の中では、ジュウキェフスキは戦死し、その頭部をトルコ兵が長槍に突き刺しスルタンの元に届けた、と説明している。生徒たちに歴史を教える上で基本の教材である教科書には、ジュウキェフスキの人柄と最期を誇張し、偉大で勇敢な人物として描いているのに対し、参考書ではヘトマンの最期をリアルかつ簡潔に表現している。教科書では、あらゆる材料を使って、ジュウキェフスキは素晴らしい人物であり、ポーランドの誇りであるということを伝えたい、という意図があるように感じられる。



図 10 『1620年ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキの死』  
*Śmierć Stanisława Żółkiewskiego w roku 1620*, Witold Piwnicki 画  
(HISTORIA 6 s.100)

<sup>33</sup> Witold Piwnicki ポーランドの画家。

・フサリアについて

ヴィトルト・ピヴニツキの絵画『1620年ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキの死』(図10)の中央部分に一人のフサシュが描かれている。このフサシュは、ヘトマン、スタニスワフ・ジュウキェフスキだと思われる白の長衣を来た老人に何かを進言している。周りの人々よりも重厚な装備、左肩からはフサリアの権威の象徴の一つであった豹の毛皮をまとっている。この絵の中でフサシュだと識別した要素は、やはり背中に背負う翼である。混乱した背景に対して、フサシュの翼と甲冑と毛皮が際立つように描かれている。

教科書、参考書ともに、1620、1620年のトルコとの戦いの説明の中でフサリア、またはフサリアを暗示するような単語は一回も使用されていないが、教科書にはフサシュの装備の写真が載せられている(図11)。教科書と参考書の説明文の中に、フサリアは登場していないが、他の文献や史実では1620年代のトルコとの戦いでフサリアの活躍が記録されているし、ヴィトルト・ピヴニツキの絵画では、中央に翼と毛皮をまとったフサシュが描かれているから、教科書のこの項目で、フサシュの装備の図を掲載したのだろう。兜と膝まである甲冑で、背中部分に大きな翼を背負っている。翼は頭の上へと大きく湾曲し、その羽根の大きさと力強さを表わしている。兜はシシャク(*szyszak*)と呼ばれ、ペルシア起源で、ポーランドやハンガリーに伝わったものである。図12のものは兜の鍔から口近くまで目と鼻を保護する鉄板が付いている。この板がついていないシシャクも多い。装飾が凝った物は耳の上辺りに羽根のような鉄細工が施されている(図13)。総合的に見て、この図11の装備は基本の形だと思われる。これよりも装飾が凝ったものだと兜や鎧に様々な細工が施してあるし、装備が軽いものだと上半身だけの鎧で、翼が頭の上でカーブしていないものになる。教科書の中にこの図11が掲載されるより前にフサリアについての記述や図がないことから、この図が生徒にとってフサリアの基本形になるのではないだろうか。



図11 HISTORIA6 s.100



図 12 保護板つきシシャク



図 13 羽根付シシャク

## 2. フミエルニツキの乱(1648)

### 概要

#### a) ザポロージェ<sup>34</sup>のコサック

16、17 世紀ウクライナの北部、ポーランド化したウクライナのマグナートとポーランドのマグナート、シュラフタは巨大な土地を所有していた。彼らの所有地はヤギェウォ朝の王とその後継者が、功績のある軍の指揮官やマグナートに与えたものだった。彼らは“王の子ども(królewięta)”と呼ばれた。所有地の開発を望むマグナートやシュラフタたちは、ある期間、入植者たちを農奴制とあらゆる小作料から解放した。この“解放(wolnizna)”は 25 年間続いた。ポーランド、リトアニア、ロシアからウクライナ北部へと農奴逃亡者の大群が流れ込んだ。しかし、徐々にウクライナの農民の状況は悪化し、17 世紀はじめには“解放”はなくなり、農奴へと戻った。農奴抑圧の増大は、農民が人口希薄地域であるウクライナ南部へ逃げる要因となった。

ポーランドのはずれの南東にあるドニエプル川の地は肥沃だったが、タタールの襲撃により衰弱していて人口希薄だった。ウクライナの南の地には無人の平原が続き、さらに遠く黒海沿岸まで、タタール人が遊牧生活を送っていた。この無人の平原には近隣国から犯罪行為の刑罰を逃れてきた人々が身を隠していた。冒険を求める人々もその地へと向かった。彼らが入植し、共同体を形成した。そのような人々がコサックと呼ばれるようになった。彼らは略奪行為をしに、度々タタールやトルコに出向いた。コサックの一部は自分の財産を所有し、漁業や狩猟に携わっていたが、戦いの戦利品だけで暮らしているものもいた。アタマンがコサック軍を統率した。彼らの指揮官は、ドニエプル川にある島の一つに作った要塞、シーチ<sup>35</sup>を本拠地としていた。ポーランド王は戦闘能力に優れていたコサックを高く評価していた。1570 年、政府は 300 名のコサックを軍人として雇い、給料を支払い、

<sup>34</sup> ポーランド語 Zaporozże、ウクライナ語 Запорожжя。ウクライナのドニエプル川のほとりにあった歴史的地名。

<sup>35</sup> sicz 16 世紀から 19 世紀前半にかけてあった、ウクライナ・コサックの軍事・行政の本拠地。河中の島または川岸という攻めにくく守りやすい土地に築城されるのが一般的であった。

課税免除の特権を与えた。名前を登録することから、彼らは登録コサック<sup>36</sup>と呼ばれた。好待遇を受けることになったコサックを、シュラフタたちは不快な思いで見ている。コサックの居住地は逃亡農奴の隠れ家だったからである。



図 14 シーチ (*HISTORIA 6* s.103)

#### b) 反乱の原因

16,17 世紀、コサックは度々農民を指揮し反乱を起こした。これらは国王軍やマグナートの私軍によって鎮圧された。抑圧が強まるにつれ、コサックの共和国に対する敵意が増大した。それに拍車をかけたのが、ウクライナの正教徒に対するカトリック聖職者の布教である。1638 年、非登録コサックを農奴として隷属させ、村落をシュラフタの所有地に併合するという決定が下されると、コサックの不満が爆発した。

#### c) 反乱勃発

1648 年ポーランドから独立することを目標に、ボフダン・フミェルニツキ<sup>37</sup>が先頭に立ち反乱を起こした。ウクライナの農民や零細シュラフタがコサック軍に参加し、タタールも彼らを支援した。イエレミ・ヴィシニョヴィエツキ公<sup>38</sup>率いるポーランド軍は、ズバラシュ<sup>39</sup>の要塞でフミェルニツキ軍に包囲された。王ヤン・カジミェシュが援軍と共にやってくるまで、ポーランド軍は数週間にわたりコサックとタタールの優勢な力を前にして城を守つ

<sup>36</sup> 登録コサックは特権と自由を認められる代わりに、ロシアやトルコとの戦いなど、軍事力をポーランドに提供した。その数は 1630 年には 8000 名に上った。非登録コサックは登録コサックの数を常に上回り、1630 年の時点では 6 万人に達した。

<sup>37</sup> Bohdan Zenobi Chmielnicki (1595-1658) ポーランド・リトアニア王国の貴族、コサック。ザポロージェ・コサックの政府キーシュの一人である書記官 (1622-1647) とウクライナ・ヘトマン (1648-1657) を歴任。キエフ・ルーシ崩壊後のウクライナ史上最大の英雄とされる。

<sup>38</sup> Jeremi Michał Korybut Wiśniowiecki (1612-1651) 現在のウクライナがあるヴィシニョヴィエツ (Wiśniowiec)、ウブニェ (Lubnie)、ホロウ (Chorol) の公。ポーランド・リトアニア共和国に仕えるルーシ・リトアニア系の古い貴族の家系であるヴィシニョヴィエツキ家の家長で、当代きってのマグナートであった。1646 年よりルーシ県知事を務める。ウクライナの歴史家、当時のウクライナ・ポーランドはおろか、全ヨーロッパで一番の富裕な貴族であった。

<sup>39</sup> Zbaraż 現在のウクライナ西部にある町。

た。ポーランド軍はズボロフ<sup>40</sup>でコサックとタタールと対峙し、和解した。王はフミエルニツキをウクライナのヘトマンであることを承認し、ズバラシュは解放された。

2年後の1651年、フミエルニツキは協定を守らず、ヴォウイン地方<sup>41</sup>を攻撃した。報復としてヤン・カジミェシュは9万の兵を集め、ベレステチュコ<sup>42</sup>でコサック軍と激突した。戦いは3日間続き、3日目ポーランドはタタールをコサック軍から引き離し、コサック軍を手中に収め、壊滅的な敗北に追い込んだ。

新たな独立の方法を模索したフミエルニツキは、モスクワと手を結んだ。それが1654年のプレヤスワフ協定<sup>43</sup>である。ポーランドはこの協定を承認しなかった。

ポーランドがフミエルニツキに手を焼いているうちに、スウェーデン軍が襲撃を行い、ポーランドは対スウェーデン戦に移行しなければならなくなった。スウェーデンとの戦いの中に、ボフダン・フミエルニツキが亡くなり、新しいウクライナ・ヘトマン、イヴァン・ヴィホフスキ<sup>44</sup>は1658年ハジャッチュ<sup>45</sup>でポーランドと和訳を結んだ。

## 考察

教科書、参考書ともに共通するのは、コサックたちは好戦的で気性が荒い、という記述である。コサックの中には、狩猟や漁業を生業とする者の他に、街を襲撃して得た戦利品だけで暮らしていた者がいた。彼らの略奪行為を含めた荒々しい行動とともに、統率力の高さも際立って記されている。参考書の中に、コサックは非常に統率された軍事集団のようなもので、日頃からいつ戦いが始まっても大丈夫なように備えてあったという記述がある(„*Historia Polska dla Piotrka*” s. 90)。そのような集団であるが故に、コサックの指揮官であるアタマンの力は強く、コサックたちは彼に忠実だった。コサックたちは幾度もトルコが実権を握る黒海へ繰り出し、略奪行為を行っている。オスマン帝国の首都イスタンブールの郊外の街さえも襲撃している。ポーランド王にとって、このような行為はトルコがポーランドを襲撃する口実になってしまうため悩みの種だったが、それと同時に、自分が手を焼くトルコに太刀打ちできるコサックの軍事力を高く評価していた。

フミエルニツキの乱で見え隠れするのは、当時の権力闘争である。王、マグナート、シュラフタ、コサック、農民の利益が複雑に絡み合っている。教科書と参考書では、軍事力を高めトルコを打ち取りたい王、農奴を確保し権力を保持したいシュラフタ、独立したい

<sup>40</sup> Zborov 現在のスロヴァキアにある町。

<sup>41</sup> Wołyń (ウクライナ語: ヴォルィーニ) 西ウクライナにある歴史的地名。東のプリピャチ川と西のブック川の間位置し、北のポーリーシャと南のガリツィア・ボジーリャに接している。16世紀はポーランド王冠領内にありヴォルィーニ県が置かれた。

<sup>42</sup> Beresteczko ヴォウインにある町。

<sup>43</sup> ペレヤスワフ (Perejasław、ウクライナにある街)にて、コサックとロシア・ツァーリ国のツァーリ、アレクセイ1世の間で交わされた協定。コサック国家をツァーリの庇護下に置くという内容だった。

<sup>44</sup> Iwan Wyhowski (?-1664) ポーランドのシュラフタでコサック・ヘトマンだった。

<sup>45</sup> Hadziacz ウクライナにある町。プシホル川のほとりにある。

コサックの思惑を表わすのに多くのページを費やしていた。トルコとの戦いの説明では戦いの仕方や経過を細かく描写しているが、フミェルニツキの乱では戦いが起こるまでの背景を多く記述している。この反乱では、子どもたちに戦の背景や当時のポーランド国内の勢力状況を十分知ってもらいたい、という意図があったのだろう。

#### ・フサリアについて

この戦いの説明には、フサリアの説明やフサリアが描かれた絵画等は載っていなかった。フミェルニツキの乱といえば、映画化もされているヘンリク・シェンキェーヴィチ<sup>46</sup>の小説『火と剣とによって *Ogniem i mieczem*』<sup>47</sup>が有名である。この作品の中では、フサリアの大軍や疾走が多く描かれている。教科書と参考書を読んだだけではわからないが、授業で子どもたちに教える際にシェンキェーヴィチの作品や映画を教えているかもしれない。そうだとしたらフミェルニツキの乱に関して、生徒たちはフサリアが登場したという事実を教科書や参考書からではなく、教師の説明、文学作品、映画などで知ったのだろう。

### 3. スウェーデンとの戦い——ポーランド=スウェーデン戦争と「大洪水」(1650-1655)

#### 概要

##### a)原因

ステファン・バトリー<sup>48</sup>の死後、スウェーデン王妃でポーランド王ジグムント1世の娘カタジナを母にもつ、スウェーデン王子ジグムント3世ヴァザ<sup>49</sup>がポーランド王になった。ポーランドのマグナートはジグムント3世が王になることで、ポーランドとスウェーデンが手を組み、バルト海の実権を握ることを期待した。彼は熱心なカトリック教徒であり、ポーランドでは、彼の治世に反宗教革命が最終的勝利を収めた。ジグムント3世はプロテスタントのシュラフタの権利の剥奪を行ったので、彼らに嫌われていた。ジグムント3世は熱心なカトリック教徒であるが故に、プロテスタント国家であるスウェーデン人によって

<sup>46</sup> Henryk Sienkiewicz (1846-1916) ポーランドの作家。17世紀の英雄の活躍を描いた三部作『トリロギア』*Trylogia*で最もよく知られる。

<sup>47</sup> 1884年にヘンリク・シェンキェーヴィチによって発表された歴史小説。三部作『トリロギア』*Trylogia*第一作目。1648年から1651年に起こったフミェルニツキの乱を題材としている。イタリア、フランス、ユーゴスラヴィア共同制作で1962年、ポーランドで1999年に映画化されている。

<sup>48</sup> Stefan Batory (1533-1586、在位 1576-1686) 1571年からトランシルヴァニア公、1576年ジグムント1世スターリ(Zygmunt I Stary)の娘アンナ・ヤギェロンカ(Anna Jagiellonka)との結婚後、ポーランド国王、リトアニア大公となる。多くの歴史家に最も優れた選挙王と評価されている。

<sup>49</sup> Zygunt I Waza (1566-1632、ポーランド王在位 1587-1632、スウェーデン王在位 1592-1599) スウェーデン王ヨハン3世とスウェーデン王妃、ポーランド王ジグムント1世の娘カタジナとの間に生まれた。

スウェーデン王位から引き摺り下ろされた。ジグムント 3 世の伯父<sup>50</sup>がスウェーデン王位に就いた。ジグムント 3 世はスウェーデン王位を諦めず、王位を奪還しようとした。これがポーランドとスウェーデンの戦いの第一の原因である。

二つ目の原因はインフランティ<sup>51</sup>問題である。1564 年、スウェーデンはインフランティ北部を占領し、インフランティ問題がスウェーデンの政治の中で大きな役割を担うようになる。スウェーデンはインフランティにだけ固執していたのではなく、北東欧地域のバルト海沿岸一帯を支配しようとする目論んでいた。バルト海沿岸を支配したいというスウェーデン王の熱意は他国、なによりもポーランドとロシアの反感を買った。その結果、16 世紀と 17 世紀の転換期にスウェーデン=ロシア戦争とスウェーデン=ポーランド戦争が起こった。



図 15 ジグムント 3 世ヴァザ (*HISTORIA* 6 s.97)

#### b)キルホルムの戦い(地図 2 参照)

1605 年リガ<sup>52</sup>の街近くキルホルム<sup>53</sup>で、ポーランド軍はスウェーデンと戦った。ポーランド軍を率いたのはリトアニアのヘトマン、カール・ホトキューヴィチである。4 千の兵で構成されたポーランド軍は、その 3 倍の数のスウェーデン軍を撃破した。この戦いで勝利を決定付けたのはフサリア部隊の突撃である。キルホルムの戦いでスウェーデン王は傷を負い、ポーランド軍はスウェーデン軍の旗と大砲を手に入れた。ポーランド王とシュラフタの争いが起こったため、スウェーデン人をインフランティから追い出すことができなかった。スウェーデン人たちはインフランティで自国のように政治を行った。

#### c)オリヴァの戦い

キルホルムの戦いから十数年後、スウェーデンが再び行動を起こし、インフランティの

<sup>50</sup> カール 9 世(スウェーデン王在位 1604-1611) ポーランド王、ジグムント 3 世の父ヨハン 3 世の弟で、ジグムント 3 世から王座を奪った。

<sup>51</sup> **Inflanty** リヴォニアともいう。ドイツ騎士団、ポーランド王国、スウェーデンと支配者を変えた後、最終的に 18 世紀初頭に始まった大北方戦争によってロシア帝国に属した。1561 年よりリトアニア大公国領土内にあった。20 世紀になって、リヴォニアの北部をエストニア、南部をラトビアとして国家が成立した。

<sup>52</sup> **Ryga** バルト海沿岸地域にある街。現在のラトビア共和国の首都。

<sup>53</sup> **Kircholm** ラトビアにある街。リガから北へ 18 キロいったところにある。

残りの地域も征服した。グダンスクを占領することはできなかったが、バルト海沿岸地域に腰を据え、グダンスク港の船舶から関税を取った。これはポーランド経済に大きなダメージを与えた。ポーランドは再びスウェーデンとの戦いを開始するために、艦隊を準備しなければならなかった。セイムで軍艦造船のための課税が決まり、数は多くないけれども、ポーランドの艦隊がバルト海に現れた。1627年オリヴァ<sup>54</sup>の海戦でポーランドは大勝利を収めた。しかしポーランド軍は長期にわたる戦いで衰弱していたので、不利な条件で休戦協定を結ぶことになってしまった。その内容は次の通りである。「スウェーデンは王領地を除いたインフランティとプロイセン港を保有する、しかしポーランドの商品から関税を取る権利は無い。」

#### d)スウェーデンのポーランド襲撃——シュラフタの裏切り

1655年、二手に分かれたスウェーデン軍がポーランドを攻撃した。一方はシュチェチン<sup>55</sup>からヴィエルコポルスカに入り、もう一方はインフランティから入りリトアニアを攻撃した。ヴィエルコポルスカのウイシチェ<sup>56</sup>では、スウェーデン軍に立ち向かおうとマグナートを含むシュラフタたちが集結した。しかし彼らは、財産とカトリック信仰の不可侵を約束する代わりにスウェーデン王支配を承認する、というスウェーデンの要求を呑んだため、スウェーデン攻撃を行わなかった。最も力のあったリトアニアのマグナート、ヤヌシュ・ラジヴィウ<sup>57</sup>とボグスワフ・ラジヴィウ<sup>58</sup>は、戦うことなくラジヴィウ家<sup>59</sup>の領土の一部をカロル10世グスタフ<sup>60</sup>に譲り渡した。

短い間ではあったが、ワルシャワを含む全ポーランドがスウェーデンの手中に収められた。多くのシュラフタとマグナートが、シュラフタの特権を侵害しないという確約を得、スウェーデン側に寝返った。ポーランド王ヤン・カジミェシュ<sup>61</sup>は国外へ逃げることを余儀なくされ、当時オーストリア支配下にあったシロンスク<sup>62</sup>で避難生活を送った。スウェーデンは容易にポーランドを手に入れ、略奪を行った。商店から品物を、教会から貴重品を略

<sup>54</sup> Oliwa グダンスクの地域の一つ。

<sup>55</sup> Szczecin ポーランドの北西部、バルト海沿岸にある街。

<sup>56</sup> Ujście ポーランド北西部にある街。ヴィエルコポルスカ県に属する。

<sup>57</sup> Janusz Radziwiłł (1612-1655) ポーランド・リトアニア共和国のマグナートであり公。1646年よりリトアニア野戦ヘトマン、1653年よりヴィルノ県知事、1654年よりリトアニア大ヘトマンを務めた。

<sup>58</sup> Bogusław Rzdziwiłł (1620-1669) ポーランド・リトアニア共和国のマグナート、公。1638年からリトアニア大旗手、1648年からリトアニア騎兵長官、1657年からはプロイセン公国の総督の任にあった。

<sup>59</sup> Radziwiłłowie、リトアニア大公国およびポーランド・リトアニア共和国において、数世紀にわたって権力の中枢にあり国政に重きをなしていたマグナートの家系。1547年より一族全員が神聖ローマ帝国の公爵を名乗る資格を得ていた。

<sup>60</sup> Karol X Gustaw (1622-1660、スウェーデン王位 1654-1660) バルト帝国の絶頂を極めた武威の君主。ポーランド・スウェーデン戦争やカール・グスタフ戦争などの「北方戦争」を引き起こし、絶対王政の萌芽を築いた。

<sup>61</sup> Jan Kazimierz (1609-1696、ポーランド王位 1648-1668) ヴァーサ家出身のポーランド王。また1660年までは名目のみのスウェーデン王を称していた。

<sup>62</sup> Śląsk ポーランドにある地域。

奪し、略奪品は船で本国へと持ち帰った。人々には高い税を課されたポーランドの人々は苦しい生活を強いられた。

#### e)ヤスナ・グラの防衛(1655)

ポーランドを支配したスウェーデンであったが、彼らが侵入できない場所が1つあった。それが修道院長の司祭アウグスティン・コルデツキ<sup>63</sup>が取り仕切っているヤスナ・グラ<sup>64</sup>の要塞修道院である。修道院長はスウェーデン軍が攻めてくる前に、修道院の宝物や聖母の絵画をシロンスクへ送った。コルデツキは貴重品を隠し、12基の砲台と砲兵隊を集めた。要塞には160の守備兵、数十名の修道士、逃げてきたシュラフタたちしかいなかった。

スウェーデン軍将軍ブルハルド・ミュラーは修道院の宝物のことを知り、ヤスナ・グラの麓まで来て、兵を通すよう要請した。修道院長はその要請を断った。ミュラーは大砲による要塞攻撃を開始した。ヤスナ・グラの建物は火で覆われたが、守備兵がすぐさま火を消し大砲で応戦した。大砲による応酬が三日三晩続いた。4日目の夜、激しい戦いの中、スウェーデン軍は隊列を引き連れて歩く行列を要塞の空中に見た。スウェーデンとポーランド両軍の中で、ポーランド王ヤン・カジミェシュが帰ってきて、民衆がスウェーデンを攻撃し、ヤスナ・グラの包囲解放に駆けつけるという噂が流れた。ミュラーは12月24日に今までで一番大きな攻撃が起こると予想した。突撃の撃退後、ミュラーは賠償金だけを要求した。それに対し修道院長は、チェンストホーヴァは貧困状態であると手紙を書き、2枚の聖母の絵を送った。40日間の包囲の後、12月25日夜、スウェーデン軍は要塞から撤退した。コルデツキの英雄的防衛はポーランド人の士気を高め、ポーランド中に大きな影響を及ぼした。

#### f)チャルニェツキの活躍と農民の参加

ステファン・チャルニェツキ<sup>65</sup>は対スウェーデン戦争の英雄であり、優れた指揮官だった。彼はパルチザン戦法を得意としていた。チャルニェツキはピリツァ川<sup>66</sup>のほとりで行われたヴァルカ<sup>67</sup>の戦い(1656年)の勝利で有名になった。効果的に敵を攻撃するために、彼は開戦と同時に川へ突進し、川を渡ってスウェーデン人を攻撃した。

農民と町民がスウェーデンの暴挙の最大の被害者だった。農民は森に逃げ、スウェーデン軍部隊を攻撃する小さな集団を作った。このような戦いが国内全土に広がった。次第にスウェーデンに対抗する武装運動にシュラフタが参加し始めた。状況は王ヤン・カジミェシュがポーランドに帰って来ることができるほど良くなった。王はルヴフで、完全にポー

<sup>63</sup> Augustyn Kordecki (1603-1673) ポーランドのヤスナ・グラ修道院長

<sup>64</sup> Jasna Góra ポーランドの南部チェンストホーヴァ(Częstchowa)にある修道院。ポーランドで最も重要な修道院のひとつ。『黒のマドンナ』という聖母マリアの肖像画はヤスナ・グラの最も貴重な宝物である。

<sup>65</sup> Stefan Czarniecki (1599-1665) ポーランドのシュラフタ。1664年からキエフ県知事、1665年王冠領野戦ヘトマンを務めた。

<sup>66</sup> Pilica ポーランドの南部、中央部に流れる川。ヴィスワ川の支流。

<sup>67</sup> Warka ポーランドの南東部にある街。ピリツァ川のほとりにある。

ランドが解放されるまで戦い、祖国の防衛に立ち上がった貧しい民衆の役務を和らげると宣誓した。王は人々に歓迎されポーランドに戻った。1656年夏、ポーランドはワルシャワを奪回した。ポーランドからスウェーデン人が追い出され、チャルニェツキは10万の軍の先頭に立ち、デンマーク王国を占領するスウェーデン人を討ち取るためにデンマークへ向かった。

#### g) プロイセンの臣従の終焉と戦いの終結

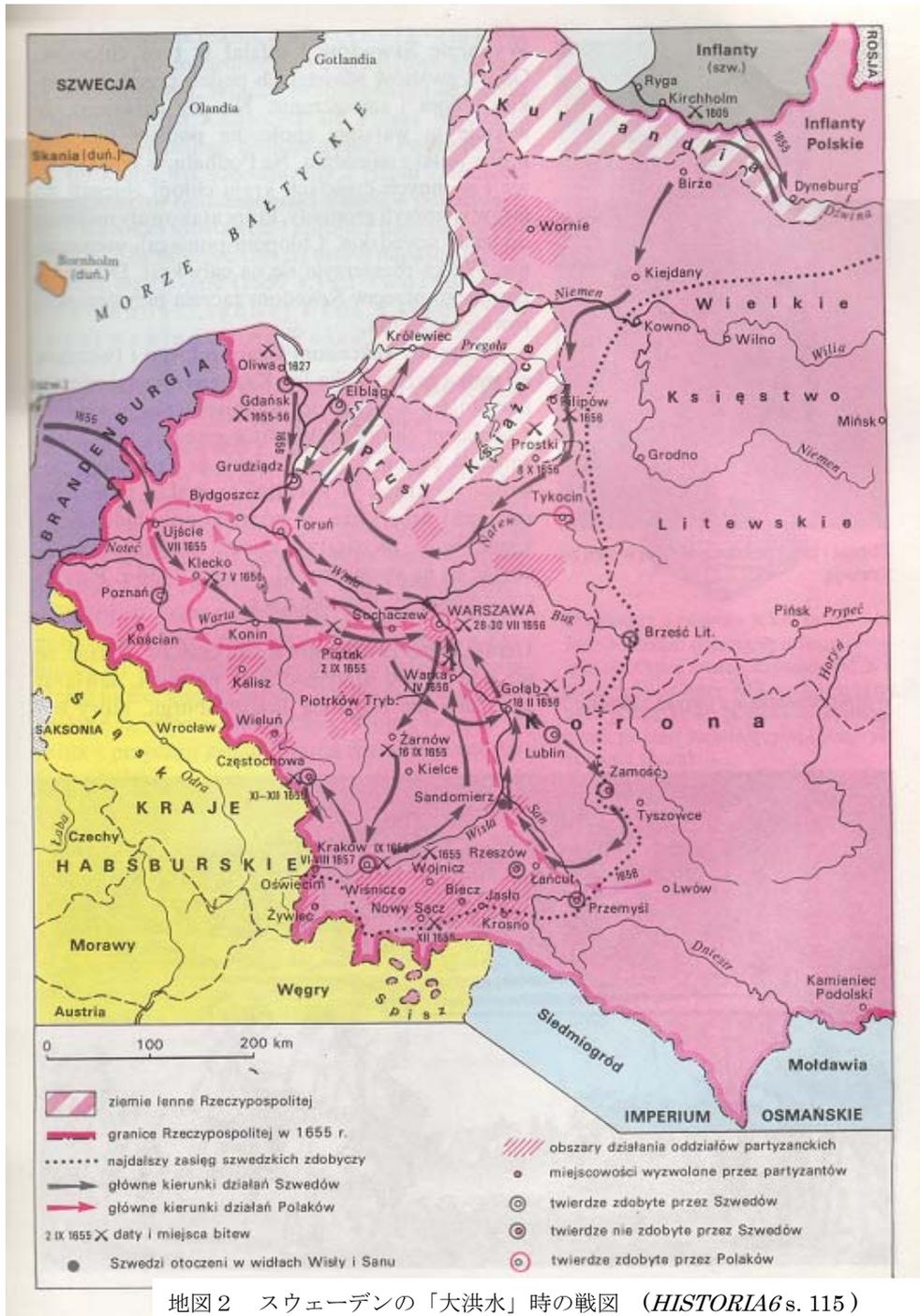
カール・グスタフは、ポーランド支配に難航したため、プロイセン公つまりポーランド王の臣下ブランデンブルク<sup>68</sup>公と協定を結んだ。ポーランドから離れたかったブランデンブルク公は、スウェーデン王と協定を結び、ポーランド侵略を開始した。この侵略を食い止めたいポーランドは、プロイセン公国の臣従の解消とポーランドからの独立を認めた(1657年)。

1660年グダンスク近郊オリヴァにおいて、ポーランドとスウェーデンの間で講和条約の署名が行われた。当時ロシアと戦っていたポーランドは、この条約を了承するしかなかった。スウェーデンはインフランティの大部分を保持し、ヤン・カジミェシュにスウェーデン王位の要求を断念させた。

この戦いはポーランドの土地が荒廃する大きな原因となった。村々の大部分が焼かれ、街は破壊され、ポーランド経済の停滞の原因の一つとなった。

---

<sup>68</sup> ブランデンブルク辺境伯 神聖ローマ帝国の貴族。選帝侯のひとつ。ドイツの北東部を領地とした。1618年には神聖ローマ帝国の領外であったプロシア公領との婚姻関係から同君連合ブランデンブルク＝プロイセンとなった。1701年、ハプスブルク家から本来ローマ帝国領外であったプロシア公領の王(プロイセン王)としての称号を得て、プロイセン王国が成立した。



地図2 スウェーデンの「大洪水」時の戦図 (HISTORIA6s. 115)

## 考察

スウェーデンとの戦いは、ジグムント 3 世ヴァザ、ヴワディスワフ 4 世、ヤン・カジミェシュ、3 人のポーランド王の治世の間続いた。途中休戦状態もあったものの、1605 年から 1660 年まで行われた大変長期にわたる戦いであった。教科書では、図や地図などの挿入も含め 11 ページにわたって説明している。そのページ数の多さから、この戦いの重要度の高さが窺える。一方、参考書では、教科書に比べて説明は少なく簡潔にまとめられていた。参考書は歴代ポーランド王の順番に起こった出来事を紹介する形式なのだが、ジグムント 3 世ヴァザの項目の挿絵は、フサリアがスウェーデンの歩兵を追撃する場面とトルコとの戦いの場面である。ジグムント 3 世のスウェーデン王位要求問題は、ポーランドにとって大きな問題であり、かつスウェーデンとの戦いの発端だったため重要である、ということだろう。

フミエルニツキの乱は、王やシュラフタの利益や権力が複雑に絡み合った反乱だったが、スウェーデンとの戦争はそれがより顕著に現れている。戦争の原因となったスウェーデン王位継承問題とインフランティ問題は 2 ページにわたって説明されている。またそれと同時に、王とマグナート、シュラフタの確執や裏切りも細かく説明されていた。教科書には、シュラフタがジグムント 3 世を嫌っていたということと、キルホルムの戦いの後に王とシュラフタの間で内戦が起こったという記述がある。これらのことはシュラフタやマグナートたちの王に対する忠誠心が薄れていたこと、また彼らが王権を押しえつけるほどの大きな権力を持っていたことを言外に匂わせているのではないだろうか。

教科書と参考書の挿絵で共通したのが、オリヴァの海戦とヤスナ・グラの防衛である。教科書のオリヴァの海戦の場面では、ポーランドがスウェーデンとの戦いに備えて新しく造った軍艦に関連する絵が載っている。オリヴァの海戦は、ポーランドにとってそれほど有利ではない条件で終結したものの勝利を収めた。教科書ではそれを「素晴らしい勝利 *światne zwycięstwo*」と書いてある。この海戦の説明文自体は短いが、関係する図は 2 ページにわたって掲載している (図 16)。このことから、ポーランドにとってこの海戦の勝利はスウェーデンとの戦いの中でも誇れるものだったことがうかがえる。参考書には、旗をつけたポーランドとスウェーデンの艦隊が戦っている場面(図 17)と、ポーランドの軍艦 1 隻を細かく描写した図(図 18)が挿入されている。図 17 では、ポーランドの軍艦よりもスウェーデンの軍艦の方が少し大きく描かれている。これは軍艦についている旗にもいえることである。軍艦の大きさによってスウェーデンとポーランドの兵力の違いを暗示しているのだろう。一方、図 18 には軍艦の細かい描写とその設計図が描かれている。この軍艦はオリヴァの戦いの際に新しく作られたので、設計図というアイテムを使ってそれを強調している。



110



111



図 17 オリヴァの海戦  
(Historia Polska dla Piotrka s. 88)



図 18 軍艦(Historia Polska dla Piotrka s. 89)

ヤスナ・グラの防衛は、窮地に追い込まれていたポーランドがスウェーデンに対し巻き返

しを図るきっかけとなった出来事である。教科書に使用されている図は、ヤスナ・グラの修道院長アウグスティン・コルデツキの人物画(図 19)と、ヘンリク・シェンキューヴィチの文学作品『大洪水 Potop』<sup>69</sup>を映像化した作品の中のスウェーデン軍がヤスナ・グラの要塞を砲撃している場面(図 20)である。図 19 にはヤスナ・グラの聖母画も描かれている。当時からポーランド人に信仰されていた聖母画を、スウェーデン軍が襲撃してくる前に安全な地に送ったコルデツキの賢明さを讃えた絵なのではないだろうか。図 20 はヘンリク・シェンキューヴィチの作品『大洪水』の映画の一部である。『大洪水』はシェンキューヴィチが書いた『三部作 Trylogia』の一つである。教科書にその映画の一部が掲載されていることから、シェンキューヴィチ作品の影響力の強さと、この作品がポーランド人の中で一般的で、ポーランド文学の代表作品だということがわかる。学校の授業で「大洪水」を勉強し、書物や映画で「大洪水」を追体験することによって、人々の中でイメージがより強く形成されるのだろう。

参考書でも同様に、スウェーデン軍がヤスナ・グラの要塞を砲撃している場面が挿入されている(図 21)。スウェーデン軍の奥に要塞がそびえる姿は、要塞内の守備兵の絵を使用するよりも守りが固く、鉄壁を思わせる。教科書と参考書で同じような図柄が使用されているということは、ポーランド人にとって、ヤスナ・グラの防衛といえはこのような図柄が思い起こされるのだろう。

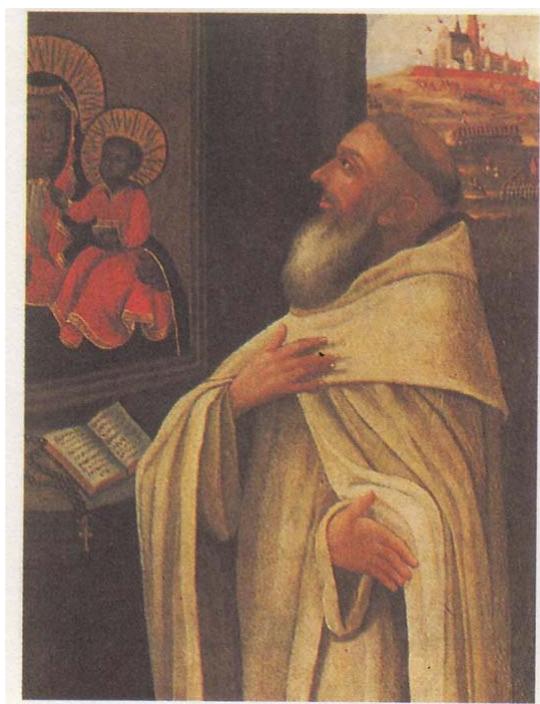


図 19 アウグスティン・コルデツキ  
(*HISTORIA 6* s. 112)

<sup>69</sup> ヘンリク・シェンキューヴィチが 1886 年に発表した『三部作』の第二作。1655 年から 1660 年に起こったスウェーデンの「大洪水」を題材としている。1974 年ポーランドで映画化された。



Atak wojsk szwedzkich na klasztor Jasnogórski (scena z filmu „Potop”)

図 20 映画『大洪水』より



図 21 ヤスナ・グラの防衛 (Historia Polska dla Piotrka s.94,95)

・フサリアについて

教科書、参考書ともに、スウェーデンとの戦いではフサリアの描写が他の戦いよりも多く見られた。フサリアが登場したのはキルホルムの戦いである。以下で教科書と参考書の一部を抜粋し考察する

#### a)教科書

①

„O zwycięstwie polskim zadecydował atak jazdy pancernej zwanej h u s a r i ą. Doskonale uzbrojone pancerne chorągwie uderzyły niepowstrzymanym pędem, łamiąc i tratując szeregi nieprzyjacielskie ciężarem koni i jeźdźców.”(*HISTORIA 6* s. 108,109)

装甲騎士いわゆるフサリアの突撃がポーランドの勝利を決定付けた。素晴らしい装甲装備をした隊列が馬と騎手の重さによって敵の隊を割り、敵を踏み潰し、とどめがたい勢いをもって攻撃した。(訳八木)

文字間にスペースをとって書かれているのは、これが新出単語でその説明を欄外に記してあることを意味する。その説明文は以下の通りである。

②

„Husaria od połowy XVI w. do XVIII w. polska ciężka jazda zaopatrzona w kopie i miecze, nosząca zbroje ze skrzydłami.” (*HISTORIA 6* s. 108)

14世紀後半から18世紀まで活躍したポーランドの重騎兵で長槍と剣を装備し、翼の付いた鎧を身につけていた。(訳八木)

上記の説明文が載っているページにはフサリアの攻撃の図(図 22)とその説明も掲載されていた。



図 22

フサリアの突撃

(*HISTORIA 6* s.109)

③

„ Atak husarii polskiej w bitwie pod Kircholmem w 1605 r. Wojskiem polskim litewskim dowodził hetman Jan Karol Chodkiewicz.

Przeciw wojskom szwedzkim licznym 11 tys. żołnierzy stanęło 4 tys. doborowych żołnierzy polskich, którzy odnieśli błyskotliwe zwycięstwo. Ranny król szwedzki uciekł z pola walki.

Husarię od drugiej połowy XVI do XVIII w. stanowiła ciężkozbrojna jazda polska. Do uzbrojenia husarii doszedł koncerz (rodzaj broni siecznej) i dwa pistolety oraz charakterystyczne skrzydła umocowane u siodła lub przy zbroi. Husaria silnym uderzeniem przełamwała szyki wroga.”  
(*HISTORIA6* s. 109)

1605年キルホルムの戦いでのポーランド・フサリア軍の攻撃。ヘトマン、ヤン・カロール・ホトキューヴィチがポーランド・リトアニア軍を指揮した。

1万1千のスウェーデン兵に対し4千の精選された兵士で構成されたポーランド軍が立ち上がった。彼らは輝かしい勝利をもたらした。傷を負ったスウェーデン王は戦場から逃げ出した。

16世紀後半から18世紀までポーランドの重騎兵、それがすなわちフサリアであった。コンツェシュ(刀剣類)、2丁のピストル、鞍もしくは防具に備え付けられた特徴的な翼がフサリアの装備だった。フサリアは激しい攻撃によって敵の隊列に打ち勝った。(訳八木)

これらの文の中でまず注目したいのが、フサリアの装備である。どの説明文にも、フサリアの装備の特徴が記されている。これらの説明文を見ると「ポーランドの重騎兵がフサリア」と簡潔に捉えることができる。そのため重騎兵の特徴である鎧(*pancerz, zbroja*)がフサリアの特徴の一つとして表わされている。武器に関して、②では長槍(*kopia*)と剣(*miecz*)、③ではコンツェシュ(*koncerz*)(図 23)とピストル(*pistolet*)を挙げている。一般的に、フサリアの武器はサーベル(*szabla*)(図 24)、コンツェシュ、ピストル、長槍だといわれている。これに加えて弓矢や短剣も挙げられるが、それらの武器で敵を攻撃する表現はあまり見られないから、これらの武器は付随的なものとして捉える事ができる。サーベルは剣の一種なので、教科書に載っている説明文で、フサリアの基本武器といわれているもの全てが挙げられていることになる。生徒たちは教科書で剣、長槍、コンツェシュ、ピストルがフサリアの基本武器だと覚えるのだろう。



図 23 コンツェシュ



図 24 サーベル

図 22 を見ると、長槍はその先端にポーランド王国の小旗をつけて、天に向かって立てているものが特徴的である。また地面と平行に構えている長槍もある。実際の戦いにおいて、このように槍を持って突撃することによって、敵の恐怖心と圧迫感を煽った。図 22 の中の長槍と赤白の小旗は非常に象徴的で、強い印象を与える。

フサリアの装備の中で最も特徴的であり、フサリアの象徴だといえるものは、背中に付いた翼である。②、③では翼のことが記されているし、図 22 にも翼がはっきりと描かれている。図 22 では多くの羽根が付き、まるで翼を大きく広げたかのように描かれている。フサシュ以外の兵には見られない翼は、生徒たちの目に印象的に映り、フサリアの特徴だと知るのだろう。

次に注目したいのが、フサリアの戦法である。①では防具について記述はあるものの、武器についての記述は無い。道具というよりも突撃という戦法がフサリアにとって大きな武器であるかのように記されている。図 22 も、まさに突撃を行っている場面を取り上げている。馬や騎手が前かがみになり疾走しているのがわかる。図 22 の右下には車輪や衣服が踏み潰されている様子描かれている。この描写が突撃の勢いの凄まじさを物語っている。

また、①と③ではフサリアが勝利をもたらした、と記してある。両方ともそこまで長々とした説明ではないので、文を読むとフサリアと勝利(zwycięstwo)が結びついているように感じられる。

スウェーデンとの戦いでの教科書の記述では、フサリアの特徴として鎧、剣、長槍、翼といった装備と疾走や突撃といった戦法が特徴付けられている。

## b)参考書

参考書でも同様にキルホルムの戦いの場面でフサリアが登場する。以下に抜粋する。

„Do zwycięstwa najbardziej przyczyniła się husaria – ciężka jazda nosząca półbroje ze skrzydłami u ramion” (*Historia Polski dla Piotrka* s. 87)

フサリア(肩のところに翼がついた上半身の鎧を身にまとった重騎兵)が最も勝利に貢献した。(訳八木)

教科書同様に、翼、鎧、勝利がキーワードになっている。この3つがフサリアの象徴として記述されている。

参考書には、この文のほかにフサリアの隊列がスウェーデン軍の歩兵を追撃する絵が挿入されている(図 25)。図 25 は参考書のジグムント 3 世 ヴァザの項目の見開きに大きく載せられている。いつ行われた戦いであるのか記述が無いので定かではないが、歩兵の格好がスウェーデン式(衣服、兜、髪型より判別)なので、スウェーデンとの戦いの一場面を描いていると思われる。フサリアたちは鎖帷子の上に上半身の鎧を身につけ、背に翼を背負っている。シシャク(兜)の上には羽根が付けられ、強さを誇張している。どのフサリヤも手にはサーベルを、腰にコンツェシュを携帯している。色鮮やかに大きくフサリアの姿が描かれているため、これをみた子どもたちは、この絵のフサリアの姿を覚えるだろう。また、この図 25 では川で攻撃をしているので水しぶきが大きい。水しぶきに加えて馬の表情や脚の動きからフサリア部隊の速さ、疾走感を感じることができる。この描写はフサリアと疾走を結びつけるのに大きな影響を与えている。



図 25 フサリアのスウェーデン軍追撃(*Historia Polska dla Piotrka* s. 94,95)

#### 4. トルコとの戦い②——カミエニェツ・ポドルスキの包囲(1672)、第二のホチムの戦い(1673)

##### 概要

##### a)カミエニェツ・ポドルスキの包囲(地図3参照)

1621年にホチムで交わされたトルコとの和平協定は、ポーランド＝トルコ間の争いを終結させなかった。17世紀後半、トルコはポーランドがスウェーデンとコサックとの戦いで衰弱しているチャンスを狙って遠征を開始した。当時、ヤン・カジミェシュが退位し、ミハウ・コリブット・ヴィシニョヴィエツキ<sup>70</sup>が王位に就いていた。1672年スルタン率いるトルコの大軍はポドーレ<sup>71</sup>に至り、ポーランド南方の重要な要塞カミエニェツ・ポドルスキを占領した。トルコに従属するタタール人は、ルブリン地方に達した。トルコに追い詰められた状況の中登場したのが、ヘトマン、ヤン・ソビェスキである。彼はトルコの主軍と戦えるほどの兵力は持っていなかったものの、タタール軍の撃破に成功した。王ミハウ・コリブット・ヴィシニョヴィエツキはスルタンの元に和平交渉をする使節を派遣した。トルコはポーランドにとって不名誉な条件を突きつけたが、それを呑まなければならなかった。トルコがウクライナとポドーレを占領し、ポーランドはトルコの支配したそれらの地域に賠償金を支払う、という内容だった。この条件に怒ったポーランド人は、新たな遠征を行うための課税を可決し、ヤン・ソビェスキが指揮官に選ばれた。

##### b)ホチムの戦い

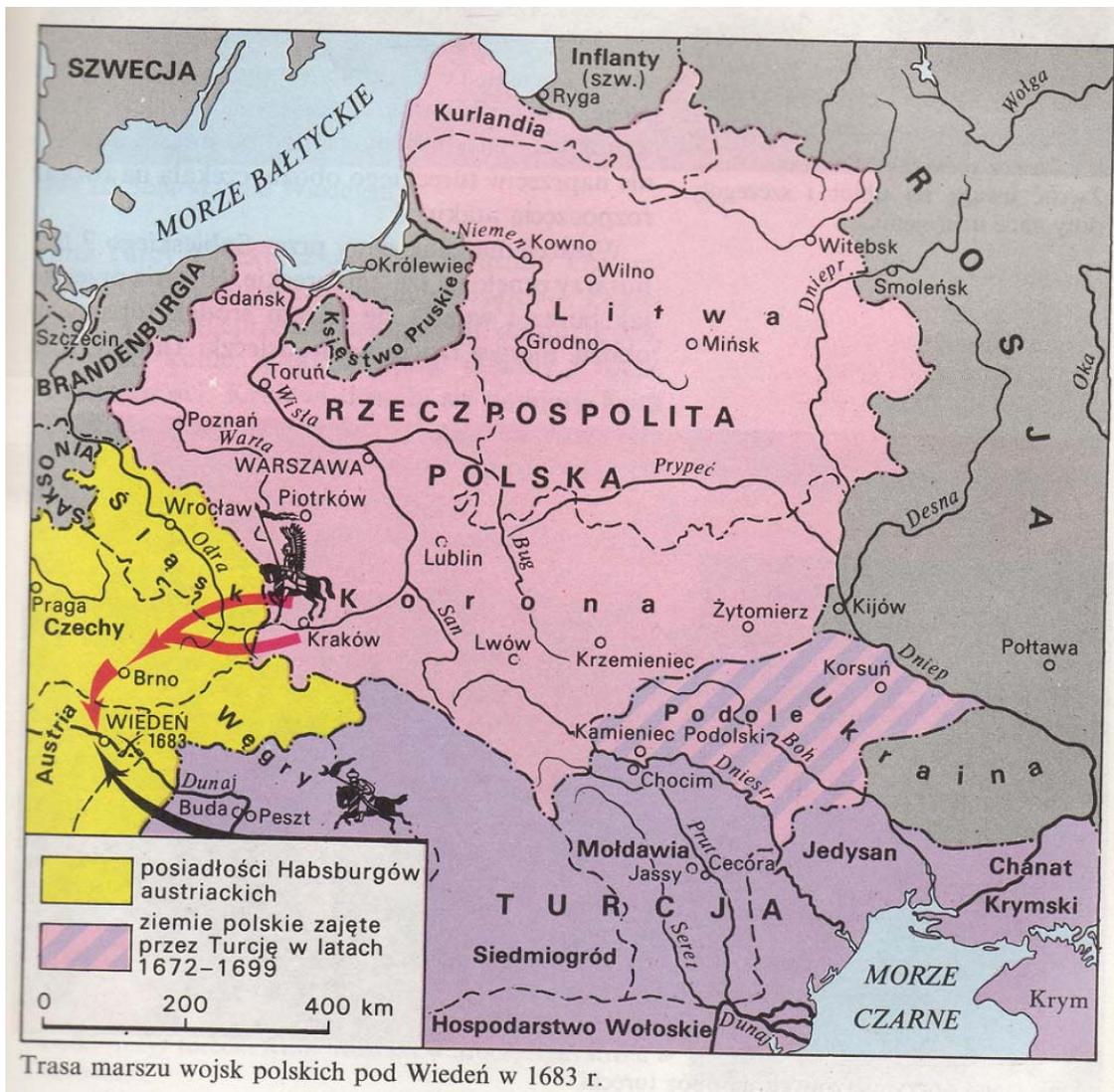
1673年ヤン・ソビェスキは数万の兵を率いてトルコの大軍がいるホチムへ向かった。トルコ軍はポーランド軍よりも先にホチムに到着し、全ての塹壕を奪っていたため、ポーランド軍が身を隠せる場所はどこにも無かった。トルコ軍はポーランド軍よりも数が多く、その中で最も脅威だったのがイエニチェリつまり歩兵だった。

戦いが起こったのは11月だったが、非常に寒さが厳しく、刺す様な風が吹き、雪の混ざった雨が降っていた。トルコ軍は南方から来たため寒さに弱く、衣服も薄かった。ソビェスキはその状況の中、時が過ぎるのを待った。朝が来ると、土塁の上に立ち、攻撃開始の合図を出した。夜の寒さで動けなくなったトルコ軍は隊列が乱れたが、イエニチェリだけは果敢に攻撃を仕掛けてきた。フサリアがイエニチェリを攻撃した。フサリアは道中にいるものを全て踏み潰し、数千のイエニチェリがフサリアの突撃で倒れた。トルコ兵は逃げ出した。ポーランド軍はトルコの陣営、400の旗と60基以上の大砲を獲得し、大勝利を収めた。この勝敗の知らせはヨーロッパ中に広がった。

<sup>70</sup> Michał Tomasz Korybut Wiśniowiecki (1640-1673、ポーランド王位 1669-1673) ポーランド王。ルーシ県知事イエレミ・ヴィシニョヴィエツキ公の息子。

<sup>71</sup> Podole 西ウクライナに位置する歴史的地名。

トルコは当時ポーランドのかなりの地域を占領していたが、それで満足していないことは明白だった。トルコはホチムで勝利を収めたソビェスキだけを恐れていた。ポーランド人はソビェスキだけが祖国を救うことができると考え、シュラフタたちはワルシャワでの選挙でヤン・ソビェスキを王に選出した。



地図3 17世紀後半の地図(HISTORIA 6 s. 115)

## 考察

教科書、参考書ともに、この項目で共通したのがポーランド王の扱い方である。ミハウ・コリブット・ヴィシニョヴィエツキは“無能、教養も経験も無い、戦闘技術を知らない”など悪く扱っている。また父親イエレミ・ヴィシニョヴィエツキ公はフミエルニツキの乱でポーランド軍を指揮して戦った経験があるため、ミハウ・コリブット・ヴィシニョヴィエツキは父との才能や経験の差を比較して記されていた。それに比べてヘトマンであったヤン・ソビェスキを“素晴らしい指導者、勇敢、西欧の戦闘技術に通じている、教養豊か、外国語堪能”など最高の褒め言葉で表現していた。このように、王の紹介の仕方からポーランド人の歴代の王に対する感情がわかる。例えば先に登場したジグムント3世ヴァザは“ステファン・バトーリには劣る”と形容し、ヴワディスワフ4世は“才能溢れる活発な王”と表現している。ソビェスキが輝かしい功績ばかりを残しているのに、ミハウ・コリブット・ヴィシニョヴィエツキは才能が無いと書かれ、印象が薄くなってしまっている。昔のポーランド人が抱えてきた王に対する評価を、教科書や参考書でそのまま載せているから、授業を受けた生徒たちも同じような評価をもつ。このようなループがずっと続くのだろう。

### ・フサリアについて

教科書の説明文ではフサリアは登場しなかったが、参考書ではホチムの戦いでフサリアが活躍したと書かれている。以下に抜粋する。

„ Tylko janczarzy walczyli dzielnie i wytrwale. Wówczas uderzyła polska husaria. Tratowała wszystko, co napatkała na drodze. Kilka tysięcy janczarów legło pod tym uderzeniem.” ( *Historia Polski dla Piotrka* s. 100,101)

イエニチェリだけが勇敢に諦めることなく戦った。その時ポーランドのフサリアが攻撃をした。道中で出くわすもの全てを踏みつぶした。数千のイエニチェリがその攻撃で倒れた。(訳八木)

教科書のスウェーデンの戦いについての記述の抜粋①にもあったように、フサリアが敵を踏み潰して倒す様子が描写されている。数千の攻撃的なイエニチェリを踏み潰している、という表現がフサリアの突撃の威力の凄まじさを物語っている。

この説明文が掲載されているページには、ホチムの戦いの様子が描かれていて、その中でも特にフサリアが特徴的である(図 26)。

この絵には説明も一緒に掲載されている。以下に説明文と図を抜粋する。

„Rotmistrz husarski w hełmie i półbroi z buzdyganem w ręku. Uzbrojony w szabłę, koncerz i dwa pistolety.” (*Historia Polski dla Piotrka* s.101)

兜と上半身の鎧を着て、手にブズディガンを持ったフサリアの騎兵大尉。サーベル、コンツェシュ、2丁のピストルを装備している。(訳八木)



図 26 ホチムの戦い (*Historia Polska dla Piotrka* s.100,101)

右側に大きく描かれている一人の騎兵に注目したい。これは突撃の姿をクローズアップしたものである。図に添えられた説明文によると、彼は騎兵大尉(rotmistrz)である。右手にブズディガン(図 27)をもち、左手で手綱を引いている。突撃する時に、フサシユたちは小旗の付いた長槍やサーベルやブズディガンを持ち、前に突き出す格好を取る。馬が土を大きく蹴っている様子が、突撃の力強さを表している。図 26 の騎兵大尉は、サーベルや槍ではなくブズディガンを持っている。このブズディガンにも大きな意味がある。これは打撃系の武器としても使用できるが、それよりも権力の象徴の意味合いが強かった。王やヘトマンの人物画ではブズディガンも手に持った姿がよく描かれている。例えばヤン 3 世ソビエスキやスタニスワフ・ジュウキエフスキの絵がそうである(図 28、29)。図 26 の騎兵は大尉なので、権威の象徴であるブズディガンを持ち、部隊の先頭に立ってフサリアを先導している。

次に装備を見ていくと、ほとんど先に紹介したフサリアの絵と同じものである。説明文にもあるように、羽根付きのシシヤク、毛皮をまとった上半身の鎧を身につけ、腰にサーベル、馬の首の付け根にはピストル、左脚にコンツェシュを装備している。異なるのはフ

サリアのシンボルともいえる翼が無いことである。翼がフサリアの装備の特徴であるように教科書や参考書で記述されていたが、今回の絵には翼がない。図26の背景は戦いの全体図で、そこにはフサリアの隊列が描かれている。翼をつけたフサシュもいるし、翼をつけていないフサシュもいるようである。図26から推測すると、翼はフサリアの特徴であるが、全員が必ず装備していたのではない。翼があまりにも特徴的だったので、後世の人々がそこに注目したのだろう。この推論を裏づけるものとして、ユゼフ・ブランド<sup>72</sup>の絵画『フサシュ』 *Husarz* を挙げる(図30)。この絵画はフサシュという題名が付きながらも背中に翼が無い。翼を背負ったフサシュの絵の方が圧倒的に多いが、翼を装備していないフサシュもいるのだ。



図27 ブズディガン



図28 ヤン3世ソビェスキ(画ヤン・マテイコ)



図29 スタニスワフ・ジュウキェフスキ  
(作者不明)

<sup>72</sup> Józef Brandt (1841-1915) ポーランドの画家。戦争絵画で有名。

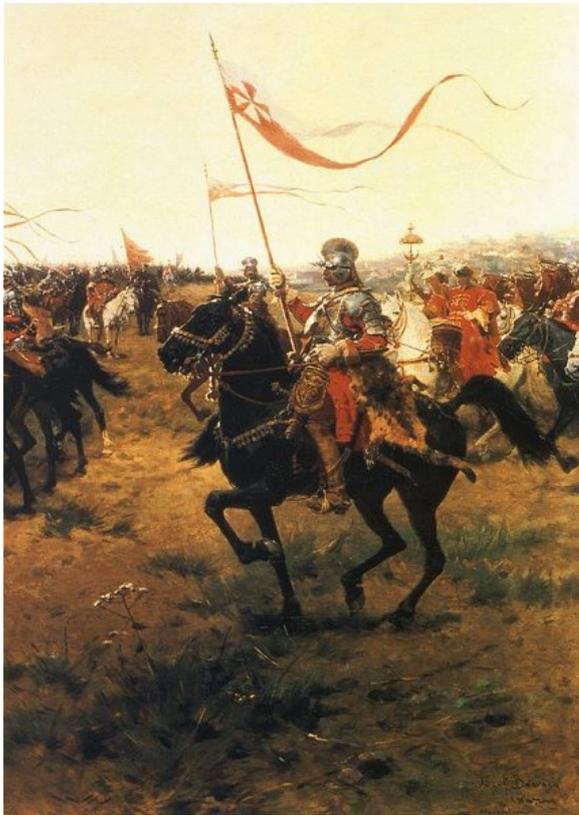


図 30 『フサシュ』 *Husarz*, Józef Brandt 画

## 5. ウィーン包囲(1683) 地図3 参照

### 概要

1683年、大宰相カラ・ムスタファ<sup>73</sup>率いるトルコの大軍がオーストリア遠征を開始した。10万のトルコ兵とタタール兵がウィーンを包囲した。神聖ローマ皇帝レオポルト1世<sup>74</sup>は、キリスト教徒の諸王侯に手紙を書き援助を要請した。ポーランド王ヤン3世ソビェスキは要請に応え、3万の軍を引き連れてウィーンへ急いだ。ものすごい速さで軍勢は進み、1日70キロも走行した。ウィーン近郊で、ドイツ諸領邦からなる軍と合流し、オーストリア軍の指揮官はためらうことなくソビェスキに指揮を譲った。

1683年9月12日、ポーランドとオーストリアが力を合わせ、トルコと激突した。夜明けに、攻撃開始の合図が鳴り響いた。まず、ポーランドとドイツの歩兵が攻撃を開始し、山の中腹からトルコ兵を追い出した。そしてポーランドの騎兵が前進し、突撃の合図を待った。ソビェスキの合図で7000人からなるフサリア部隊がトルコ軍に突撃した。大宰相カラ・ムスタファも逃げ出した。ポーランド王はトルコ陣営にあった大砲、火薬、食糧、馬、豪華な織物を手に入れた。戦いの翌日、ヤン3世ソビェスキはウィーンへ厳かに入った。

ポーランドの勝利の知らせはヨーロッパ中に広まった。この戦い以降、トルコはヨーロッパに対し威嚇的な態度をとることをやめた。十数年後、トルコはポーランドにポドーレを返還し、ウクライナから撤退した。ポーランドは戦いに勝ち、ヨーロッパ諸国から賞賛されたが、ポーランド国内は大きな戦いで疲弊し、経済は悪化してしまった。シュラフタはますます祖国の幸福を考えなくなってしまった。王は病気がちになり、最後は国政を行う力が残っていなかった。ヤン3世ソビェスキが死んだ瞬間から、ポーランド人にとって困難な時代が始まった。

### 考察

#### ・フサリアについて

ウィーン包囲の項目では、教科書と参考書両方でフサリアについての記述と図が掲載されている。

#### a)教科書

教科書では、本文中に2枚の図にフサリアが登場する。1つ目が地図である(地図3)。この地図には、1683年の勢力状況と、ポーランド軍とトルコ軍の道筋が示されている。ポーランド軍とトルコ軍を示すマークに注目したい(図31、図32)。図31は明らかにフサシュである。なぜこれがフサシュであると判別したのかというと、翼と長槍が描かれているから

<sup>73</sup> Kara Mustafa Paşa (1634-1683) オスマン帝国の大宰相(首相)。メフメト4世に仕え、第二次ウィーン包囲を敢行した。

<sup>74</sup> Leopold I Habsburg (1640-1705、神聖ローマ皇帝在位 1658-1705) ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝

である。これまで他の戦いで説明してきたように、フサリアの装備の特徴に翼と長槍が含まれている。ポーランド軍を翼と長槍を持った騎兵つまりフサシュで表現するということは、ポーランド人にとってフサリアがポーランド軍の代表なのだろう。また、この図のように、簡単にフサリアを表現する時に、翼と小旗付きの長槍を描いていることは、翼と長槍がフサリアのシンボルであることを意味している。次にトルコ軍を表わすマーク図 32 では、頭にターバンのようなものをかぶり、長衣を身にまとっている。手に小旗がつき先端に三日月のようなものがついた棒を持っている。ポーランド人もしくはヨーロッパの人々にとって、ターバン、長衣、三日月の棒がトルコを象徴するものなのだろう。



図 31 ポーランド軍のマーク



図 32 トルコ軍のマーク

教科書にはユゼフ・ブラントの絵画『ウィーンの戦い *Bitwa pod Wiedniem*』(図 33)が載っている。トルコ軍とソビエスキ率いる連合軍の戦いを描いたものである。右にあるのがトルコ軍の陣営のテントである。中央にフサリア部隊がいる。長槍を地面に平行に構えながら、馬とともに騎兵が身体を前にかがめた突撃の瞬間を描いている。見えにくいですが、背中に翼を背負っている。フサリア部隊の中にポーランド軍旗がある。軍旗は軍隊にとって非常に大事なもので、戦いの勝敗を軍旗の数で決めることもある。また騎手は軍隊の中でも位が高い。大事な軍旗がフサリア部隊の中で立っているということは、フサリア部隊がポーランド軍の代表部隊であることを意味する。



図 33 『ウィーンの戦い』 *Bitwa pod Wiedniem*, Józef Brandt 画 (*HISTORIA 6* s.122)

教科書の本文中では、どのようにフサリアを表現しているのだろうか。以下が抜粋である。

„Wreszcie na znak dany przez Sobieskiego 7 tys. husarzy runęło na szeregi tureckie. Husaria przeszła jak burza i wdarła się w sam środek tureckiego obozu. Pierwsi rzucili się do ucieczki Tatarzy, a za nimi Turcy.” (*HISTORIA6* s.122,123)

ついにソビエスキが下した合図で 7000 人のフサリアがトルコの隊列に突撃した。フサリアは嵐のように通過し、トルコ軍陣営のまさに真ん中へと押し入った。フサリアの第一陣が逃げるタタール兵、その後ろのトルコ兵に突進した。(訳八木)

この説明文でもフサリアの攻撃の様子を記している。注目したいのが、フサリアの突撃、突進を嵐(*burza*)と比喩していることである。フサリアの突撃の威力の大きさや速さ、翼が上げる大きな音を嵐(*burza*)の一単語で表わしている。生徒たちはこの説明と絵画からフサリアの攻撃の凄まじさを感じたのだろう。

#### b)参考書

参考書に掲載されている図も、フサリアがトルコ軍を攻撃している場面である(図 34)。右にいるフサシュはサーベルを手に持ち、まさにイエニチェリを攻撃するところである。この姿はフサシュの定型そのものである。強いて言えば、翼が今までに出てきたものと少し異なる。フサシュの翼は鎧に備え付けられたものと、鞍に備え付けられたものの 2 種類あるが、彼は鞍にくくりつけるタイプである。今まで出てきたのは鎧に備え付けられたタイプである。他の文献によると、動きやすさからいって鞍に備え付けるタイプの方が多かったらしいが、絵画では鎧に備え付けられている場合が多い。

彼の後方にはポーランド軍がいる。翼をつけた騎兵はいないようだが、小旗付きの槍を持ち重厚な鎧と毛皮を身にまとっていることと、ポーランド軍の先頭にいることからフサシュと判断しても良いだろう。絵画の左側にいるのがトルコ軍である。馬のほかに、ラクダがいるということが異国的である。左隅に 3 人の男性がいるが、これがイエニチェリである。絵の左側中央には身なりのいい男性がいる。装飾付きのターバンを頭に巻き、右手にブズディガンを持っていることから、トルコ軍の隊長クラスまたは大宰相カラ・ムスタファだと推測される。

教科書、参考書ともに、フサリアを筆頭としたポーランド軍がトルコ軍に攻撃を仕掛けるシーンを描いたものが掲載されている。たった 7000 人のフサリア部隊が数万のトルコの軍に先手を打って攻撃を仕掛ける姿は、ヤン 3 世の賢さ、ポーランド軍の強さと勇敢さを表現しているのではないだろうか。

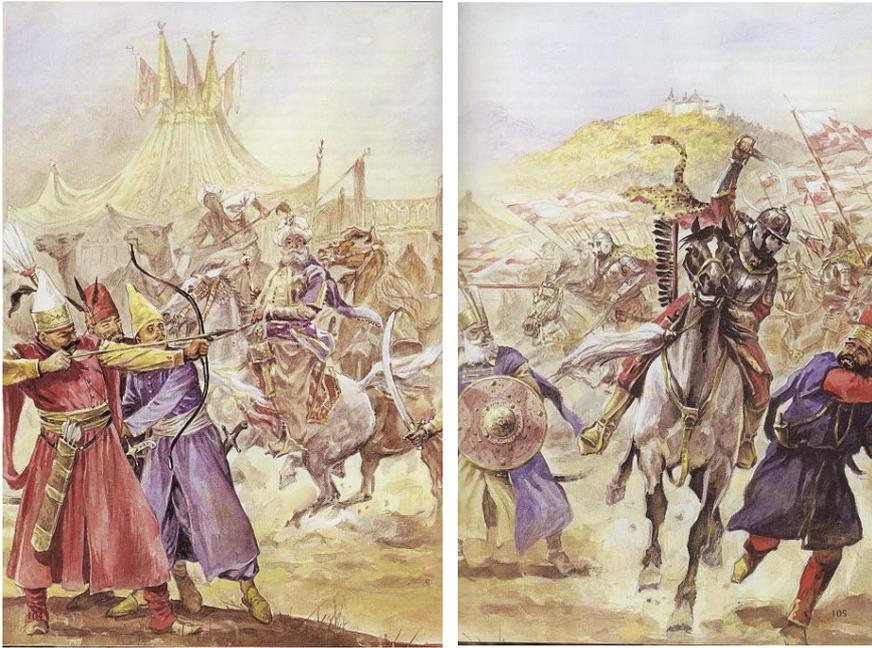


図 34 ウィーン包圍 (*Historia Polska dla Piotrka* s.104,105)

## 6. まとめ

・フサリアについて

### a)登場箇所

教科書や資料集の17世紀の項目を読むと、17世紀の戦いの中でフサリアが大いに活躍したということが伝わってくる。それはポーランドが快勝した戦いでフサリアが登場するところが要因である。例えば、1605年キルホルムの戦い、1621年、1673年ホチムの戦い、1683年ウィーン包囲である。これらはフサリアがいる戦いは必ず勝つ、ということを連想させる。教科書の中で、それらの戦いにフサリアを登場させ、勝利に貢献したことを、図を交えながら表現することで、フサリアが勝利や強さの象徴であると子どもたちが考えるきっかけや基礎が作られる。

### b)装備

図2にもあるように、兜、鎧、翼、小旗付きの長槍、サーベル、コンツェシュがフサリアの基本装備として描かれている。14～18世紀、ポーランドの重騎兵がフサリアと呼ばれるようになったことから、重騎兵にとって鎧、兜、槍は基本装備である。ここで注目すべきはサーベル、コンツェシュ、翼である。ただの剣(miecz)ではなくサーベル(szabla)やコンツェシュ(koncerz)の語を使用しているのは、これらの武器が特徴的で、他の西欧騎士が用いなかったからではないだろうか。実際、西欧の騎士は主に槍での攻撃を得意としていたらしい。馬上槍試合がその良い例である。コンツェシュは西欧でも使われていたが、それはあくまでも西欧式のものである。ポーランドで使われていたものはハンガリー式のものであった。歩兵や下級騎士は用いず、フサリアや将校たちがしばしば使用した。サーベルには様々な種類があるが、その中にフサリア・サーベルというものがある。このサーベルは湾曲した刀身と柄をもち、馬上からの攻撃を最も得意としていた。まさにフサリアのために造られたサーベルである。コンツェシュもサーベルもフサリアが頻繁に使用していたため、フサリアを象徴する武器となり、授業で基本装備として紹介されるようになったのだろう。

次に翼に注目したい。教科書の新出単語説明では、フサリアの装備が“翼が付いた鎧”と記されている。新出単語説明は生徒にとって一番基礎的な知識になるため、ここで翼を使用しているということは、翼がフサリアの特徴だということである。参考書に掲載されている図26では、翼がないフサリアが紹介されているが、他の図ではフサリアは翼を背負っている。ポーランド人は、他国の兵や国内の他の兵には見られなかった翼が、フサリアを他の騎兵から識別する最も特徴的なものであり、また功績を残したフサリアのシンボルなので誇りに思い、様々な絵画や教科書等でフサリアを表現する時に用いたのだろう。

### c)戦法

教科書と参考書では、フサリアの突撃の場面がよく登場した。突撃ではない場面は圧倒的に少なかった。使用されている絵画は全て突撃のシーンか敵を攻撃しているシーンである。フサリアの突撃はあるもの全てをなぎ倒し、踏み潰していくという描写が何回か出てきた。教科書では、フサリアの突撃を嵐(burza)と表現しているが、この表現はフサリアの様子を良く表わしている。ポーランド人は、フサリアの突撃をポーランド軍の強さの象徴だと思っていたのではないだろうか。教科書等の説明を読むと、フサリアの突撃に敵う敵はいない、という印象を受ける。フサリアといえば突撃、フサリアが突撃した戦いは勝利を収める、フサリアが登場した戦いは勝利した戦いというような連鎖があるように感じられた。

教科書、参考書に現れるフサリアの姿は、ポーランドの文学、絵画、映画、美術に現れるフサリアの姿と同じである。装備や突撃のシーンは一様だった。使用している絵画や文学の発表年代は19世紀のものが多い。教科書と参考書に現れたフサリアの基本知識は、ポーランド人が代々持ってきたフサリアの知識そのものである。

### 第三章 文学におけるフサリアの表象

文学は物事のイメージを形成する上で、大きな影響を与える。特に、分割によって国家が消滅したポーランドにとって、文学は愛国心を刺激し、国家再建に向けて一致団結するための大きな力を持っていた。この章では、文学の中でどのようにフサリアが表現されているか調べることによって、フサリアの象徴性を考察したい。

今回、引用辞典『*Księga cytatów z polskiej literatury pięknej*』<sup>75</sup>の『husaria』、『husarz』の項に掲載されていた、セヴェリン・ゴシュチンスキ、ヘンリク・シェンキェーヴィチ、スタニスワフ・ヴィスピャンスキの文学を取り上げる。彼らの作品の中で、フサリアがどのように表現されているのかを見ることによって、ポーランド文化におけるフサリアのイメージの共通点を探る。また、チェスワフ・ミウオシュの『ポーランド文学史』<sup>76</sup>を参照し、3人がポーランド社会の中でどのような力を持っていたのかを知ることで、彼らのテキストがポーランド社会に及ぼした影響も考察する。

#### 1. セヴェリン・ゴシュチンスキ(Seweryn Goszczyński / 1801-1876)

ゴシュチンスキは19世紀に活躍した、詩人、批評家、政治家であった。秘密革命組織に参加し、1830年ワルシャワ蜂起<sup>77</sup>の発端であるコンスタンティン大公の居所ベルヴェデル宮殿<sup>78</sup>を襲撃した。作家、急進的な活動家で、最終的にパリ大亡命に加わり、パリで急進的民主主義者と手を結んだ。政治家としての活動の方が目立つ人物である。

『ポーランド文学史』では、ゴシュチンスキのことを以下のように説明している。

「セヴェリン・ゴシュチンスキは生前名声を博したものの、その理由は純粋に文学的というより、むしろ政治的なものだったのではないだろうか。(中略) ゴシュチンスキは文芸批判の分野でも活躍し、19世紀ポーランドの最も重要な喜劇作

---

<sup>75</sup> 参考文献(8)

<sup>76</sup> 参考文献(11)

<sup>77</sup> 11月蜂起とも呼ばれる。ポーランドおよびリトアニアで発生したロシア帝国の支配に対する武装反乱。軍事衝突の始まりは、ピョートル・ヴィソツキに指導された若い士官学校の生徒たちが陰謀を計画し、1830年11月29日に武装してコンスタンティン大公の居所であるベルヴェデル宮殿を襲った事件である。まもなく、蜂起にはポーランド社会の大部分が参加した。蜂起はいくつかの地域で成功を収めたものの、ロシア軍に鎮圧された。

<sup>78</sup> かつてポーランド最後の王スタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキの宮殿で、1818年からはロシア帝国のコンスタンティン大公の居住地だった。1830年11月蜂起の発端の事件が起こった場所である。

家アレクサンデル・フレドロ<sup>79</sup>を恫喝し、民族の大義にまったく無関心だと批判して、長い沈黙に追いやってしまったという怪しげな功績を誇っている。」<sup>80</sup>

ゴシュチンスキは文学界で影響力を持っていたというよりも、ポーランド国家再興を目指す政治家として影響力を持っていたといえるだろう。

ポーランド演劇の重鎮であったアレクサンデル・フレドロを恫喝し、民族の大義に無関心だといって批判したという話は非常に興味深い。これは、ゴシュチンスキの愛国心が非常に強かったということの現れではないだろうか。彼は、文化は愛国心を表現する場だと捉えていたのだろう。

次に、フサリアが登場するゴシュチンスキの詩『クラクフの真夜中』 „*Północ krakowska*” を見ていきたい。

Zegar Wawelu gra czasem muzyką ;  
Dźwiękami jego wicher mąci dziko:  
Niejeden skona, nim ucha doleci!  
Lecz aż do duszy przeniknął dwunasty –  
I oto przeszłość powstała i leci  
Przed oczy ducha obłokiem zamieci.  
Rycerze, króle, niewiasty,  
W dziwnych, staroczesnych strojach,  
Ze swoją przeszłością całą,  
Lodem grobu skamieniałą,  
Suną się, roje po rojach:  
Rycerze, niewiasty,  
Brodacze, dzieci –  
Wszystko wirem się toczy  
Poprzed ducha oczy.  
Tu król koroną zaświeci,  
Tam gwizdnie hufiec husarzów skrzydlasty,  
Tu w półrozkwitła spłonie twarz dziewicy,  
Tu groźne oko iskrzy spod przyłbicy,  
Tu sejmujące koło się przetoczy,

<sup>79</sup> Aleksander Fredro (1793-1876) ポーランドの詩人、劇作家、作家。フレドロはポーランド貴族の生活様式を題材とした喜劇や、子どものための劇などを書いている。

<sup>80</sup> 参考文献(11)、413～414 頁

Tu trefniś bije w dzwonki i chychoce,  
A każdy groźnie zagładnie mi w oczy,  
Zagwizdże w uszy to groźnie, to smutno  
I rozplynie się w pomroce  
Parą bałamutną  
Zmora przeszłości, zmora to przeszłości  
Schwyciła serce, zaległa duszę!

時にヴァヴェルの鐘が音楽を奏でる。  
だが強風に激しく揺さぶられるその音は、  
耳に届く前に、絶え入ることもしばしば。  
しかし12時の鐘が魂にまで浸み込んだ——  
そしてそこに過去が現れた、  
霊の目の前へ吹雪が雲となって飛んでいく、  
騎士たち、王たち、女たちが、  
古えの奇妙な衣裳に身を包み、  
墓の氷で石化した  
自らのすべての過去と共に、  
次々と群れをなして、滑空してゆく。  
騎士たち、女たち  
髭を生やした男たち、こどもたち——  
全員がつむじ風となって  
霊の目の前に顕現する。

こちらで王が王冠を煌めかせるかと思えば  
あちらでは翼をつけたフサリアの大軍が音立てて風を切り、  
こちらで乙女の花ほころびかけた顔が輝けば、  
かしこで不吉な目が兜の頬当ての下から閃き、  
また彼方では会議する人々の輪が旋回、  
また道化師が鐘打ち鳴らしてはひやひやと笑い、  
それぞれが不気味に私の目をのぞく、  
耳へと口笛を吹く、ある者は不吉に、ある者は悲しげに、  
そして闇の中に姿を消してゆく、  
ぼやけた蒸気となって。

それは過去の夢魔、それは過去の夢魔が

心臓を掴み、魂を占領したのだ！

(『クラクフの真夜中』 „*Północ krakowska*” 訳：関口時正)

クラクフの真夜中に起きる過去の亡霊たちの騒ぎを描写した詩である。12 時の鐘の音により、過去のもものが蘇り、騒ぎを起こす。過去の象徴として、騎士、王、フサリア、伝統的衣装、セイムが挙げられている。フサリアの描写では、形容詞 „*skrzydlasty*”(翼のついた)が使われている。これはフサリアと翼の関連性を示している。“音を立てて風を切り”という表現が続き、フサリア＝翼＝風＝速さというイメージの連鎖が起こっている。“耳へと口笛を吹く、ある者は不吉に、ある者は悲しげに、そして闇の中に姿を消してゆく”という部分は、まるで呪いのように、不吉さと悲しさの余韻を残しながら消えていき、それを見聞きした者の心に恐怖のようなものを残す、というような印象を与える。“魂を占領したのだ”という箇所は、過去の幻影がいつまでも心に巣食っている、というポーランド人の当時の様子を表現するとともに、そのようなポーランド人たちを批判しているように感じられた。

かつてのポーランド王宮の輝かしい様子を表現するのかもしれないと思えば、そのすぐ後に、過去の亡霊たちが不気味に顔をのぞかせている。このように同時に表現することで、過去のもの光と闇の二面性をあらわしているのではないだろうか。この詩の中で、フサリアの描写が見られるということは、フサリアはポーランドの栄華の象徴の一つではあるが、それと同時に、もう滅んでしまった過去のものだとして認識されているのだろう。愛国心の強かったゴシュチンスキがフサリアの名を挙げたということは、フサリアがポーランドの象徴の一つである、と言えるのではないだろうか。

## 2. ヘンリク・シェンキエーヴィチ(Henryk Sienkiewicz / 1846－1916)

ポーランドの 19、20 世紀に活躍した最も優れた小説家の一人である。叙事詩作家としての顕著な功績のために 1905 年のノーベル文学賞を受賞した。歴史小説を多く執筆している。ポーランドの歴史を題材とした『トリロギア』 „*Trylogia*” は、当時大変な人気を博し、新聞連載後単行本として出版された。

『ポーランド文学史』では、以下のようにシェンキエーヴィチのことを説明している。

「80 年代に、彼は新聞に歴史三部作を連載し、それはまもなく単行本として出版された。各巻の表題は、『火と剣とによって』(1884)、『大洪水』(1886)、『パン・ヴォウオディオフスキ』(1887～1888)である。一般の反響はただちに現れ、シェンキエーヴィチは、お気に入りのあれこれの登場人物に危害を加えないでくれと手紙で他の民で来る読者の、たえまない圧力にみまわれた。『トリロギア(三部作)』は、文字が読めるポーランドのあらゆる人の手もとにゆきわたり、あらゆる青少

年の「必読書」となった。他の言語にも翻訳され、とくにスラヴ諸国で、絶大な人気を博した。(中略)彼は17世紀の言語を復元しようとも試みた。手本としたのは昔の回顧録作者たち、なかんずく、ヤン・フリゾストム・パセクであった。その結果生まれた文体は、きわめて生彩を放ち、小学校の生徒たちは『トリロギア』を読み終えたあと、その一風変わった17世紀ポーランド語で互いに話し合うようになった。<sup>81</sup>

「純真な読者は、『トリロギア』の登場人物の身になりきりすぎたあまり、それが作者の想像力のなかで生まれたのだとは考えもしなかった。時には、シェンキューヴィチがついに戦場で死なせてしまった人物の魂の安息のため、ミサを執り行うよう要請されたこともあった！」<sup>82</sup>

「シェンキューヴィチに対し讃嘆するか、軽蔑するかという態度の別は、長くポーランドにおける政治的傾向の判断基準となっていた。概して言えば、彼の著作は保守的傾向を促すものであった。大衆への影響という点にかけては彼に並ぶものはなく、第二次世界大戦中、地下組織の闘士がシェンキューヴィチの主人公たちの名前を偽名に使っていたという例を引くだけでも、それはよく理解できるのである。」<sup>83</sup>

以上のミウォシュの説明から、シェンキューヴィチのテキストの影響力の絶大さが伺える。彼の作品はポーランドの若者の「必読書」だったのである。シェンキューヴィチが創作した人物も、まるで存在した偉人のようにポーランドの大衆は捉えていた。シェンキューヴィチの書いた歴史小説は本当のポーランドの歴史である、と考えていたのだ。シェンキューヴィチが『トリロギア』で扱った題材は、ポーランドの歴史において、苦しい戦いであり、かつ、輝かしい戦歴である。ポーランド人の誇りと苦しい戦いをシェンキューヴィチが再現したことにより、より劇的にポーランド人の中に刻まれ、彼らの愛国心を刺激したのではないだろうか。特に、この『トリロギア』が発表された1884年から1888年は、ポーランドが分割され、国家が消滅していた時期である。その時期にこういった題材を扱った小説が発表されれば、ポーランド人の誇りと愛国心を強く刺激したのは間違いないだろう。だからこそ、シェンキューヴィチに対する評価が政治的傾向の判断基準になったのではないだろうか。

それでは、『トリロギア』のなかで、フサシュ及びフサリアがどのように扱われているか

---

<sup>81</sup> 参考文献(11)、511～512頁

<sup>82</sup> 参考文献(11)、512～513頁

<sup>83</sup> 参考文献(11)、514頁

考察していきたい。

①『剣と火によって』 *Ogniem i mieczem* (1884)

1648年から1651年に起こったポーランド・コサック戦争、いわゆるフミェルニツキの乱を題材としている。新聞掲載後、絶大な人気を博したために単行本化され、ポーランド及びヨーロッパ諸国で翻訳された。数回映画化されている。

a) „Ot, pamiętam jak dziś, pod Chocimiem, dwadzieścia siedem lat temu! Gdy **husaria** szła pod Lubomirskim do ataku na janczarów,”

“...27年前にホチムで起った事を覚えている！ フサリアがイエニチェリを倒すためにルボミルスキに向かった時...”

対トルコの大戦で、フサリアがトルコ軍の歩兵、イエニチェリを倒したことを回想している。

b) „Tatarzy szli jakoby na wesele, z pieśnią radosną na ustach; tam poważna **husaria** postępowała w posępnym milczeniu, idąc niechętnie na tę walkę bez sławy.”

“タタールはまるで婚礼に行くように楽しげな言葉を口にしながら戦いに向かった。一方厳粛なフサリアは重々しい沈黙の中、名誉のないこの戦いに不承不承向かった。”

タタールとフサリアのイメージが対比されている。タタールは不真面目、軽率であり、戦いを享樂のように捉えているように描いている。一方、フサリアは厳格、高潔で、名誉を重んじている人々だという印象を受ける。“重い沈黙”という表現から、タタール人のように戦いや殺しを楽しんでいない。この箇所では、タタールとフサリアをまったく正反対のものとして表現している。

c) „Oto pan Skrzetuski, niedawno jeniec wleczony za kozackim taborem, stał teraz między zuchwałym kozactwem jako pan między poddaństwem, jako szlachcic między gminem, jako **husarz** z pancernego znaku między obozowymi ciury.”

“つい今しがた捕虜としてコサックの一隊に引立てられてきたばかりのスクシェトウスキ殿、今や何と、家来たちに囲まれた主〔あるじ〕の如く、庶民に囲まれたシュラフタの如く、下っ端兵に囲まれた、装甲部隊のフサシュの如き態度で、コサックの猛者たちの只中に立っているのである。”

ここでは対になるものを、いくつか挙げている。一方のグループは奴隷、庶民、下っ端兵、コサクで、もう一方は貴族、シュラフタ、フサリアが列挙されている。前者は野蛮で身分の低いものたちなど、その他大勢というイメージで、後者は高潔で、身分の高いものたちのグループである。フサリアを下っ端兵と相反するものとして挙げることで、フサリアは軍の中で特別な一握りの人々で、他の兵とは一線を画している存在である、という印象を受ける。

## ②『大洪水』 *Potop* (1886)

1655年から1660年に起こったスウェーデンのポーランド侵攻いわゆる“大洪水”を扱った歴史小説である。

a) „Inni walili z muszkietów, aż dymy zasłoniły ich zupełnie Spojrzymy: **husaria** już rozpuściła konie. Boże, co za impet!”

“他のものはマスカット銃で攻撃した。煙がそれを完全に覆ってしまった。見ると、フサリアがすでに馬を走らせているではないか。ああ、なんて勢いだ！”

b) „A wszystkim serca waliły w piersiach gwałtownie, bo straszliwa **husaria** wynurzyła się już zupełnie i gnała wprost na nich.”

“全員の心臓が胸を激しく打った。それは恐ろしいフサリアが完全に姿を現し、自分たち目がけてまっすぐ疾走してきたからだった。”

両方の文章で共通しているのが、フサリアの突撃の勢いである。aでは、感嘆符付きの文でフサリアの勢いを表わしている。フサリアの疾走を見たときの衝撃、恐怖、畏怖など様々な感情を感じさせる。bではフサリアの突撃を目の前にした時の、敵の恐怖や絶望感が非常に伝わってくる。フサリアの突撃の速さはすさまじく、圧倒的な勢いを感じるものであると、読者に思わせる描写である。これらの描写がフサリア＝疾走、速さというイメージを人々に植えつけるのだろう。

また、a、bのシーン共に、馬に乗っての突撃である。aにははっきりと馬の描写がある。馬に乗って、砂埃を巻き上げ、敵を目指し突撃するイメージを思い浮かべることができる。これらの文によって、人々はフサリアと疾走、速さ、馬が結びついたものだという認識をするのだ。

## ③„*Pan Wołodyjowski*” 『パン・ヴォウオディオフスキ』 (1888)

1668年から1673年に起こったポーランド・トルコ戦争を題材としている。

a) „Lecz przez ten czas na czele wybranych pułków osadził silnie bramę, z dała poruszyła się **husaria**, na kształt olbrzymiego ptaka zrywającego się leniwie do lotu,”

“しかしその間コリツキが選抜連隊の先頭に立って強固に門を守った。大きな鳥がゆっくりと飛び立つような形態で、遠くからフサリアが動きだした”

フサリアを大きな鳥に例えている。出撃開始の様子を、大勢のフサシュが集まって大きな一羽の鳥が羽ばたく瞬間のように描写したのだろう。

b) „Wtem olbrzymi **husarz**, niszcząc wszystko przed sobą jak burza, dopada do białobrodego starca”

“その時、巨大なフサシュは嵐のように目の前のものを全てを倒しながら、白髭の老人のもとに駆け寄った...”

『大洪水』の抜粋と同じように、フサシュの疾走を描写したものである。今回は、一人のフサシュの突撃を嵐と比喻している。『大洪水』の抜粋部分は、フサリア部隊の突撃を表現したものが、この文は一人のフサシュの様子を表わしたものである。一人のフサシュでありながら、その勢いは嵐のようだと表現している。“目の前の全てを倒しながら”と説明を付け加えることで、その勢いのすさまじさを感じる。フサリアの突撃の勢いは集団だからこそ生まれるものではなく、フサシュ個々の勢いのすさまじさが終結することによって、さらに巨大な力を作り出すのだ、ということを示唆するような文章だと思った。

シェンキェーヴィチの『トリロギア』におけるフサリアの描写は、どれも肯定的なものだった。フサリアは高潔で勇ましく、すさまじい戦闘能力や破壊力、速さを併せ持つ最強の戦士であるかのように表現している。これらを読むと、フサリアはポーランド人にとって強さと気高さの象徴のように感じられた。先に述べたように、シェンキェーヴィチのテキストがポーランド及び周辺諸国に与える影響力は大きかった。そのテキストの中で、シェンキェーヴィチが描いたフサリアの姿は、ポーランド文化の中で典型として記憶されたのではないだろうか。

### 3. スタニスワフ・ヴィスピャンスキ (Stanisław Wyspiański / 1869–1907)

「若きポーランド」<sup>84</sup>を代表する画家・戯曲作家、詩人である。愛国主義的な作家で、民族的な劇を作った。ヴィスピャンスキはヨーロッパの傑出した芸術家であった。

<sup>84</sup> Młoda Polska 1890年から1918年のポーランドの芸術、音楽、文学において起こったモダニズムの風潮。

『ポーランド文学史』では、以下のようにヴィスピャンスキのことを説明している。

「ヴィスピャンスキの本領が十分に発揮されたのは、民族問題に関する連作群で、ここに含められるのは『婚礼』、『解放』、『軍団』、『アクロポリス』であるが、このなかの最初の作品がもっともすぐれている。(中略) 1901年2月『婚礼』の原稿は完成し、3月に劇場は上演を敢行した。(中略) この戯曲の力強い感情的衝撃はポーランド演劇の新時代の口火を切ることとなった。(中略) 登場人たちや彼らの言葉は、この劇の最初の観客に多大の感銘を与えた。このため、いくつかの表現はある態度を表わす便利な標語としてジャーナリスティックな慣用句になったほどで、さらにまたこの韻文劇の多くの台詞は、たとえば、

世界中が戦争でもかまいはしない、  
ポーランドの田舎さえ静かなら、  
ポーランドの田舎さえ平和なら。

のように、日常的なポーランド語の一部にさえなった。何人かの登場人物は諺のようにさえなり、たとえば、藁束を庭から招き入れる若い女ラヘラは、モデルナの詩人に熱をあげ讃美した女たちの典型的人物とされた(彼女のユダヤ名は新しい社会集団の勃興を暗示する)。その深紅の肩掛け、その暗い美しさ、そのどこか天上的な優雅さとともに、彼女は以後、数多くの二十世紀詩人たちによって想起されることとなった。」<sup>85</sup>

『ポーランド文学史』では、ヴィスピャンスキの代表作として、民族問題を扱った作品が取り上げられている。特に、演劇『婚礼』は大盛況で、ポーランド文化を強く刺激した。『婚礼』の中で使われていた言葉が標語や諺になったということから、シェンキエーヴィチ同様、その影響力の大きさが窺える。また、ヴィスピャンスキの作品は小説ではなく演劇である。文章で描き出す情景に動きと音楽を加え、より多くの情報を与えることによって、人々の中でより強いイメージが描かれたことだろう。イメージの鮮明さの点からいうと、ヴィスピャンスキの与えた影響は、シェンキエーヴィチより強いかもしれない。

#### ① „Wesele” 『婚礼』 (1901)

podłość odrzucić precz,  
wypisać świętą sprawę

<sup>85</sup> 参考文献(11)、585～588頁

na tarczy, jako ideę, godło  
i orle skrzydła przyprawić,  
husarskie skrzydlate szelki  
założyć,  
a już wstanie któryś wielki,  
już wstanie jakiś polski święty.

卑劣さを遠くへ投げ捨てよ。  
聖なる大義を理想として盾に描け。  
鷲羽の翼と紋章を取り付け、  
フサリアの翼持つサスペンダーを  
着けよ。  
すれば偉大な何者か立ち上がらん、  
すればいずれかのポーランドの聖人が立ち上がらん。

(訳：関口時正)

フサリアが装備をすると、偉大な者や聖人たちが立ち上がる、という表現によって、フサリアが聖人たちを呼び覚ますための重要なきっかけだという印象を受ける。ポーランド国家のシンボルである鷲や、伝統・誇りの象徴である紋章、聖なる大義をフサリアが身にまとうことから、フサリアはそれらを身につけるのにふさわしい人物だということだろう。また、翼を装備する描写によって、ここでもフサリアと翼の関連性をうかがうことができる。この箇所全体から、フサリアは卑劣さとはかけ離れたもので、気高く、聖なる騎士であるかのような印象を受けた。

## ② „Wyzwolenie” 『解放』 (1903)

Teatr narodu, sztuka, polska sztuka!  
Chcemy go stroić, chcemy go malować,  
chcemy w teatrze tym Polskę budować!  
Żupany bierzcie, delije, kontusze;

znoście mi lite pasy, krzywce, karabele,  
chłopskie gunie, sukmany, trzosi. Tłum w kościele!  
Niech w oczy biją kolory jaskrawe,  
niechaj rażą jak słońce. - Wstąg, wstążek, okrasy!  
Niechaj ich ujrzą razem, jakby w złote czasy.  
Razem, razem wy wszyscy, magnat, chłop i miasto.  
Siermiężni wy, przystańcie około Pasyjki.  
Dalej wy, wy **husaria** - wy z hrabią Henrykiem  
na czele, niedobitki - Sztandar ten z Maryjką.  
Szaraczki, wy artyści, fantazjusze, mnichy.  
Wy wszyscy! - Stróście, stróście się w ornaty,  
w ornamenta, złotogłów, we świąteczne szaty  
i zacznijcie bój myśli i szermierkę słowa -  
a ty im. Muzo, podaj ton.

民族の演劇、芸術、ポーランドの芸術よ！  
われわれはそれを飾り、描き、  
その中にポーランドを建立したいのだ！  
ジュパン<sup>86</sup>を、デリア<sup>87</sup>を、コントウシュ<sup>88</sup>を身に着けよ、  
私に帯を、クシフツェ<sup>89</sup>、カラベラを、  
グニャ<sup>90</sup>、スクマナ<sup>91</sup>、トゥショス<sup>92</sup>を渡せ。教会の群集よ！  
鮮やかな色が目を打ち、

---

<sup>86</sup> zupan ポーランドの民族服の基本をなすもので、16世紀から着用された。丈や襟の形は時と共に変化した。基本的には丈は長めで、前を小さなボタンなどで上から下まで留めた。

<sup>87</sup> delia 毛皮が裏に付いた外套で、16世紀から18世紀まで着られた民族服の一つ。最も典型的なデリアは、大きな毛皮の襟と長く垂れ下がった装飾用の襟の付いたものである。

<sup>88</sup> kontusz ジュパンの上に着られた表着で、1630年代に現れた。18世紀になるとパス・コントウショーヴィイと言われる帯がコントウシュの上締められるようになる。そして18世紀後半になると、袖のヴィロテイから腕を出し、方に引っ掛ける着方が普及する。

<sup>89</sup> krzywce 端の曲がったサーベル

<sup>90</sup> gunia コートの一種で、防寒用の外套。厚いラシャから作られる。

<sup>91</sup> sukumana 男性用外套である民俗衣装。白あるいはグレー、紺の厚いウール製で、赤い糸で縫われた。コシチューシコ放棄以降、民族蜂起の際の軍服となった。

<sup>92</sup> trzos かつてはベルト(帯)として使われていた。初めは毛織で、後にお金を入れるポケットの付いた皮製になった。

太陽のように目をくらませろ！——大小のリボンを、飾りものを！  
それらすべての揃った光景を私は見たいのだ、まるで黄金時代の時のように。  
共に、すべての者が、マグナートも、農民も、町人も共に。  
君ら、農事にいそしむ者たちよ、キリストの磔刑像をとり囲み、集まるのだ。  
さらにフサリア諸君——ヘンリク伯爵<sup>93</sup>を先頭に  
汝ら生き残りよ。——聖母マリアの描かれたあの軍旗。  
田舎侍諸君、芸術家諸君、夢想家諸君、修道士諸君。  
あなたたち全員だ！——上祭服をはおり、  
きらびやかな飾り物を、金欄緞子を身に着け、晴れ着をまとえ！  
そして思考の戦いを、言葉の決闘を始めなさい—  
そして汝、ミューズは、彼らに音楽を与えたまえ。

(訳：関口時正)

詩の前半部分では黄金時代の象徴として、伝統衣装がポーランド的なものとして挙げられている。

後半部分では、ヘンリク伯爵を先頭とし、フサリアが聖母マリアの軍旗を掲げている。ここで登場するヘンリク伯爵は脚注にあるとおり、ジグムント・クラシンスキの『非神曲』の主人公である。ヘンリクはキリスト教と貴族の代表者、指導者でありながら、自分がとう統率するものたちを侮辱し、自分と共に消滅するべきだと思っている。この詩において、ヘンリク伯爵に従うのはフサリアである。フサリアはいずれ消えなければならない存在ではあるが、今はキリスト者として戦わなければならない、というように描かれているのだろう。

#### 4.まとめ

セヴェリン・ゴシュチンスキ、ヘンリク・シェンキェーヴィチ、スタニスワフ・ヴィスピャンスキ三人の作品におけるフサリアの描写を考察したが、その中にいくらかの共通点があった。

まず一つ目がフサリアの突撃についてである。ゴシュチンスキもシェンキェーヴィチも、フサリアの突撃を疾走感のあるものとして描いている。それに加えてシェンキェーヴィチ

---

<sup>93</sup> ジグムント・クラシンスキ Zygmunt Krasiński (1812–1859)の戯曲『非神曲』„*Nie-Boska Komedia*” (1835)の主人公。劇中ではヘンリク伯爵は貴族の象徴である。

「職業的革命家パンクラツィに率いられた無心論者の革命勢力に対して、ヘンリクは〈聖三位一体〉城に立てこもり、自衛する反動勢力の指揮をとる。～中略～ヘンリク伯爵は上流階級の生活に満足できず、妻をさげすみ、〈詩〉ばかり夢みてはその妻を狂気に追いやる。～中略～ヘンリク伯爵は自分の統率している人間たちを侮辱している。彼らが腐りきった人間であり、彼自身とともに、消滅しなければならないものたちであることを知っている。」(『ポーランド文学史』チェスワフ・ミウォシュ著；関口時正 [ほか] 訳、407、408 頁)

は突撃の勢いとすさまじさ、敵に与えた恐怖を強調している。

二つ目が翼である。フサリアを表現する時に翼を挙げている。ゴシュチンスキの詩は、戦闘時に翼が風を切り上げる音を描写し、ヴィスピャンスキは誇り高いものとして翼を挙げている。翼の持つイメージは二通りあったのだろう。一方は、戦闘の時にあたえる視覚的効果と大きな音、もう一方は驚のような気高さなのではないだろうか。

三つ目は、フサリアのもつ雰囲気である。ゴシュチンスキとヴィスピャンスキの作品において、両者ともフサリアはポーランドの輝かしい時代の産物であると表現する一方、過去のものであるという意識を感じることができる。フサリアは光と影の両方を併せ持ち、過去の夢や理想の姿ではあるが、現在存在しない、または存在してはいけないもの、として描かれているように感じた。19世紀の人々の中で、フサリアはもう過去の栄光であり、誇りを感じるものの、過去と現在の状況のギャップを思い知らされるものだったのではないだろうか。

## 第四章 絵画におけるフサリアの描写

フサリアの外観や様子、人々のフサリアに対するイメージを探る上で、重要な手がかりとなるものの一つに絵画がある。文字だけでは補いきれないフサリアについての情報を、絵画が詳細に表わす。時に、実際のものとは違い、強調されたり誤って描かれたりすることがあるが、それは人々の持つフサリアに対するイメージが前面に出たものといえるので、フサリアの象徴性を考察しやすいと思ひ、この章で取り上げた。

この章では、版画で描かれたフサリアと、19～20 世紀に活躍した 3 人のポーランド歴史画家ヤン・マテイコ、ユゼフ・ブラント、ヴォイチェフ・コサックの絵画に登場するフサリアについて考察していく。

### 1. 版画におけるフサリア

諸外国の書記官が記した旅行記や記録に版画が付随している場合がある。油絵に比べ簡略して描かれている分、人々が重要なものとして捉えていた箇所が強調して欠かさず描かれている。以下に幾つかの絵を載せ、それについて考察していく。

a)

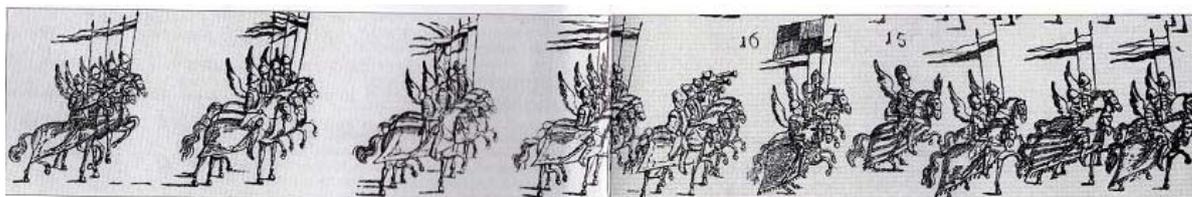


図 35

閱兵式でのラジヴィウ家<sup>94</sup>の一員のフサリア部隊の様子を描いたものである。衣服の細部から 18 世紀初頭のものだと推測されている。ひとつの隊は、右から順に、10 人の騎兵、隊長、旗手、3 人のトランペット奏者と 1 人のティンパニー奏者、他の兵より簡素な装飾の 20 人の家臣からなる。この版画で目に付くものは翼である。トランペットとティンパニー奏者以外は翼をつけている。上へ尖がっている形は、実際装備していた翼のものとは異なり、鳥を連想させる。

<sup>94</sup> Radziwiłłowic リトアニア大公国、ポーランド=リトアニア連合王国において、数世紀にわたって国政に重きをなした大貴族。

b)



図 36

1632年オランダの外交官アブラハム・ブース Abraham Booth の『使節団の旅行記』“*Journal van de Legatie*”に掲載されていたフサシュである。

上部にいるのがフサリア部隊の騎兵で、一本の翼を鞍にくくりつけている。通常片翼の場合、槍も右手に持つので、邪魔にならないように左側に括り付けるが、版画はさかさまになっているように見受けられる。突き出た鼻板つきの兜は彼の馬と同様、ダチョウの羽で飾られている。剣はハンガリー式のサーベルとコンツェシュである。下部に描かれた家臣は頬あてのついたカパリンをかぶり、毛皮とシンプルな鎧を装着した駄馬に乗っている。フサシュの位の高さを感じる一枚である。

c)



図 37

1620年ごろに出版された、トルコの脅威に対する活動を支援するために発行された本に載せられていた絵である。兜についているものはダチョウの羽根でできた羽根飾りである。毛皮をまとっているのので、鎖帷子の袖だけが見える。彼は脚にコンツェシュを鋭角に装備している。

d)



図 38

1672年12月、カール11世<sup>95</sup>の治世の到来を示すためにストックホルムで行われた騎馬演武の時、鞍に一組の翼がくくりつけられた行進用の馬を描いたものである。翼は管状の柱身にダチョウの羽根が挿入されてできている。翼は二つの輪で鞍の端に固定されている。この馬の装飾は、おそらく1655年から1656年にあったスウェーデンとの戦いで影響を受けたものとされている。フサリアの問題の一つに、翼は鞍にくくりつけて合ったのか、背中についていたのか、というものがあるが、この絵は翼が鞍についていたことを証明する一枚である。

e)1645年ポーランド使節団のパリ派遣でのフサシュの姿を描いた4枚の絵である。



図 39

<sup>95</sup> Karol XI Wittelsbach, szw. Karl XI (1655-1697、スウェーデン王在位 1660-1697) プファルツ朝2代のスウェーデン王。カール10世とホルシュタイン＝ゴットルプ公女ヘトヴィヒ・エレオノーラの唯一の子。4歳で新王となったため摂政制が敷かれた。

1枚目の翼は椰子の枝のように羽根が付いていて頭上高くまでそびえている。頭上にある説明文に、“御馬番ピリンスキ”と書いてあるが、これはこの版画を作ったパリの版画家の間違いである。御馬番ではなくフサシュである。



図 40

2枚目は、1645年にステファノ・デラ・ベッラ<sup>96</sup>がスケッチした絵である。将来のポーランド王妃ルドヴィカ・マリア・ゴンザーガ<sup>97</sup>を連れてくるためにパリへ入ったポーランドの代表団の中のフサシュの姿である。この騎兵はシュコルドスキ(Szkordoski)と説明が付けられているが、実際に陸軍大尉クシシュトフ・シュコルドスキ Krzysztof Szkordoski という人物であった。彼は背中に豊かな羽根の翼をくくりつけ、頭に羽根飾りの付いた帽子をかぶっている。長いマントを身につけ、戦闘用ではなく儀礼用の衣服を着ている。

<sup>96</sup> Stefano Della Bella (1610-1664)イタリアの画家で、特に軍事関連のテーマを扱った図版が有名である。1633年にポーランド使節団がローマに入ってきた時、儀式用の装飾をした騎兵を描いた。1642年から数年間パリに滞在した。

<sup>97</sup> Ludwika Maria Gonzaga (1611-1667) 2人のポーランド王、ヴワディスワフ4世とヤン3世カジミェシュの妻。イタリアのマントヴァ公カルロ1世の娘。



図 41

3枚目は、2枚目同様ステファノ・デラ・ベッラによって描かれた大尉クシシュトフ・スコルドスキである。背景には、3人のフサシュが様々なポーズを取っているようである。スコルドスキの馬の腹の下に見えるフサシュの翼は、直接背中にくくりつけられているので、フサシュの前かがみの体勢によって前に傾いている。これは、数少ない17世紀の背中にくくりつけられた翼の鮮明な画像であり、これは鎧を着ることなく身につけている。



図 42

4枚目は、1645年にパリで出版されたもので、再び“ブリジンスキ、ポーランド使節団の御馬番”と説明書きが付け加えられている。これは間違いであり、本当はフサシュである。このフサシュの描写は詳細のものではなく、版画家がフサシュの姿と翼をただ漠然と記憶していて、それをより自然な形に再編集し、描いたものである。そのため、他のフサシュの絵と違って、翼は低く、高さよりも羽根の方が長い。まるで天使の翼のようである。

1枚目と4枚目でフサシュを御馬番と間違えている。これは、他国においてフサシュが未知のものであったことの表れだろう。版画家はフサシュが馬と関連のあるものだという事はわかっていたものの、その外見の奇妙さから位の高い騎兵だということに気づけな

かったのではないだろうか。

f)

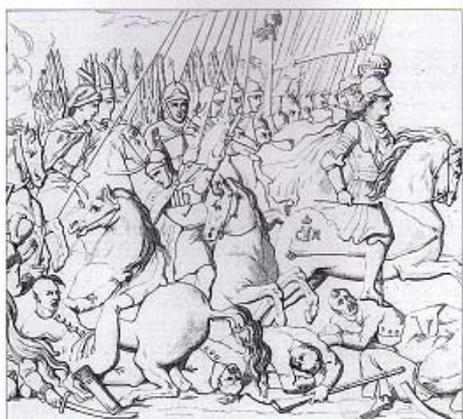


図 43

1651年、王ヤン・カジミェシュがベレステチュコ<sup>98</sup>でウクライナ・コサックの反乱軍とその味方のタタール人に対してフサリア軍を率いて戦った時の絵である。この版画はパリのサンジェルマン・デ・プレ教会<sup>99</sup>にある、19世紀に作られた王の葬式碑のものである。度々あることだが、翼はより自然な形に変形されている。つまり、実際の頭上高くまっすぐに伸びた、木と羽根で作られた翼ではなく、天使や鳥の翼のような形に変えられている。後方のフサシュが兜の代わり被っている毛皮の帽子は、1650年代の物資不足を反映している。

## 考察

版画に描かれたフサシュの絵の多くは、戦闘中よりも閲兵式やパレードなど行事・儀礼の場面だった。版画は主に17、18世紀に作られたものが多い。その時代では、戦闘で活躍するフサシュのイメージよりも、儀礼時に登場する豪華絢爛な装飾をしたフサシュのイメージの方が強かったのではないだろうか。特に、1645年のパリにおけるポーランド使節団のフサシュの格好は、鎧ではなく儀礼用の衣服である。マントと長衣を身につけ、鼻の下に髭を蓄え、背筋を伸ばし、凜とした姿で描かれている。

また、翼に関して言えば、木枠に羽根を挿入し、頭上高くそびえる翼の実際の姿を忠実に描いたものもあれば、天使や鳥の翼のように、高さより幅の方が広く、デフォルメされたものもあった。翼が忠実に描かれた絵は、それ以外のものも詳細に描かれている。こちらはフサシュの実際の姿を描いたものとして信憑性が高いといえる。一方、簡略された版画で、デフォルメされた翼が多かった。翼のもつイメージの方が先行し、より一般的で自然な翼、例えば天使や鳥の翼と同類のものとして考えたのだろう。つまり、当時の人々に

<sup>98</sup> Beresteczko 現在のウクライナ西部にある街。

<sup>99</sup> パリ最古のロマネスク様式の鐘楼。

とって、翼の正式な形よりも、フサシュが翼を装備していたというイメージの方が強かったといえるのではないだろうか。

## 2. ヤン・マテイコ、ユゼフ・ブラント、ヴォイチェフ・コサックの絵画におけるフサリア

### a) ヤン・マテイコ (Jan Matejko / 1838-1893)

ポーランドの画家で、歴史絵画、戦争絵画、肖像画等を描いた。ポーランドの代表的な画家の一人である。

「19世紀後半にポーランドのクラクフ(当時はオーストリア帝国領)を拠点に活動した画家である。彼は画家でありながら歴史に大きな関心を持ち、ポーランド史に取材した歴史画を多数残したことで知られる。とりわけ、三国分割時代に、分割前のポーランド史における重要な出来事を大型のキャンバスに描いたマテイコは、同時代のポーランド社会から精神的指導者として扱われていた。そして現在に至っても、マテイコの様々な歴史画がポーランド社会において広く知られたものとなっている。」<sup>100</sup>

### a) 『ウィーンのソビェスキ』 *Sobieski pod Wiedniem* (1883)



図 44

この絵画は、1683年の第二次ウィーン包囲を題材にしたものである。第二次ウィーン包囲は、オスマン帝国による最後の大規模なヨーロッパ進撃作戦であった。宰相カラ・ムスタファ・パシャ<sup>101</sup>率いるオスマン帝国軍と、神聖ローマ皇帝レオポルト1世<sup>102</sup>の全キリス

<sup>100</sup> 参考文献(16)、6頁より抜粋

<sup>101</sup> Kara Mustafa Paşa (1634-1683) オスマン帝国の大宰相(首相)。メフメト4世に仕え、第二次ウィーン包囲を敢行した。

<sup>102</sup> Leopold I Habsburg (1640-1705、神聖ローマ皇帝在位 1658-1705) ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝

ト教国に対する援助の呼びかけに応じた、ポーランド王ヤン・ソビェスキ率いるポーランドとドイツ諸領邦からなる連合軍との戦いであった。連合軍はオスマン軍の包囲を打ち破り、オスマン軍の惨憺たる敗北に終わった。

マテイコが描いたのは、連合軍がトルコとの戦いに勝利した後の場面である。絵画の構図の中央では、馬に乗ったヤン 3 世が司教座聖堂参事会員デンホフ<sup>103</sup>に教皇インノケンティウス 9 世<sup>104</sup>へ勝利を知らせる手紙を手渡している。ヤン 3 世の奥には、ブンチュク手官と、その後ろに王冠領大ヘトマン、ミコワイ・ヒェロニム・シェニャフスキ<sup>105</sup>と王冠領野戦ヘトマン、スタニスワフ・ヤブウォノフスキ<sup>106</sup>がいる。彼らの後ろを囲むように立っているのが旗手官とフサリアである。ブンチュク<sup>107</sup>は軍における権力の象徴であり、軍の最高司令官である王冠領大ヘトマンは二つの馬の尻尾で飾ったブンチュクを使用し、彼に次ぐ野戦ヘトマンは一つの馬の尻尾をもつブンチュクを使用した。ブンチュクの持ち手であるブンチュク手官は、旗手官に並ぶ名誉な称号だった。ブンチュク手官の赤色がヤン 3 世の黒と対比され、両方の存在感が強調されている。ブンチュク手官を強調することは、その権力を持つヘトマンや、ヘトマンが率いる軍を強調することを意味する。ブンチュク手官の後方上空には、旗手官が持つポーランド軍の旗が風に大きくなびいている。

図の左側に、神聖ローマ帝国王子ロレーヌ公カール 4 世<sup>108</sup>がいて、その頭上に神聖ローマ帝国の旗がある。神聖ローマ帝国軍の旗は、絵の中で色の点では目を引く存在だが、その大きさや数では、ポーランド軍旗に比べて圧倒的に存在感が無い。ポーランド軍旗とその周りに見える砂塵がポーランド軍の威圧感と力を誇示しているようである。その軍旗の下に見えるのが、フサリアの翼である。フサリアの兵の姿は暗くてほとんど判別できないが、翼は黒色ながらもはっきりと描かれている。密集していることで、その力強さを暗示しているように感じられる。

---

<sup>103</sup> Jan Kazimierz Denhoff (1649-1697) 1666 年モギワ(Mogiła、クラクフの一地区)の修道院長、1681 年クラクフとワルシャワの律修司祭(大聖堂に付属する運営責任者)、1682 年ローマにおけるポーランド代表、1686 年枢機卿、1688 年チェゼーナ(イタリアにある街)主教を歴任。

<sup>104</sup> Innocentius IX (pl. Innocenty IX) (1519-1591、ローマ教皇在位 1591) 第 230 代ローマ教皇。教皇グレゴリウス 14 世の時代の第一の側近として行った外交の成果によって高い評価を得て、教皇に選出されたが、2 ヶ月で病死した。

<sup>105</sup> Mikołaj Hieronim Sieniawski (1645-1683) 1663 年より陸軍大尉(rotmistrz)、1666 年より王冠領近衛隊長(strażnik wielki)、1668 年より王冠領大旗手、1674 年より王冠領大宮内長官、1679 年よりリヴフ代官、1682 年より王冠領大ヘトマンを務めた。

<sup>106</sup> Stanisław Jan Jabłonowski (1634-1702) 有能なポーランドの指揮官であった。1660 年より王冠領近衛隊長、1661 年より王冠領陣営長(obózny wielki koronny)、1664 年よりルーシ県知事、1676 年より王冠領野戦ヘトマン、1683 年より王冠領大ヘトマン、1692 年よりクラクフ城代を歴任。1673 年のホチムの戦いではフサリア隊の突撃を指揮した。

<sup>107</sup> buńczuk

<sup>108</sup> Karol IV Lotaryński (1604-1675) ロレーヌ公。フランス語名はシャルル 4 世(Charles IV)。三十年戦争およびネーデルラント継承戦争に、皇帝軍の一員として参戦し、軍務に就いていた際に死去した。

b) 『ビチナのザモイスキ』 *Zamoyski pod Byczyną* (1884)



図 45

ポーランド王ステファン・バトーリの死後、2人の候補者がポーランド王位継承権を主張した。王妃アンナ・ヤギェロンカ<sup>109</sup>の甥、スウェーデンの次期王ジグムント・ヴァザと、オーストリア大公マクシミリアン 3世ハプスブルク<sup>110</sup>の二人であった。ジグムント・ヴァザを支持したのが大法官ヤン・ザモイスキ<sup>111</sup>で、マクシミリアン 3世ハプスブルクを支援したのは、ザモイスキに敵意をもつ者たちだった。1588年、マウオポルスカのシュラフタに対し総動員令を発動したザモイスキは、クラクフにおいて、シロンスクから軍を率いて選挙に向かうマクシミリアンの行く手をふさいだ。ザモイスキ軍はクラクフでマクシミリアン軍の撃退後、彼をシロンスクの境界の向こうまで追いやった。そしてビチナの戦いでザモイスキはマクシミリアンに勝利し、彼を捕らえた。マクシミリアンは1598年ポーランド=オーストリア間の条約締結後ようやく解放されたが、彼は正式には王位継承を放棄しなかった。

マテイコが描いたのは、ビチナの戦い<sup>112</sup>でザモイスキがマクシミリアンを降した後の場

<sup>109</sup> Anna Jagiellonka (1523-1596) ポーランド王ジグムント 1世とボナ・スフォルツァの娘。ポーランド王ステファン・バトーリの妻。

<sup>110</sup> Maksymilian III Habsburg (de. Maximilian III von Österreich) (1558-1618) オーストリア大公。1590年から1618年までドイツ騎士団長、1593年より1595年までスティリア公国(Styria、近代のオーストリアの南部、スロヴェニアの北部に位置する)の摂政、1612年から1618年までチロル(Tyrol)の摂政を務めた。

<sup>111</sup> Jan Zamojski (1542-1605) ポーランドのマグナート。1567年より王冠領副大法官、1578年より王冠領大法官、1581年より王冠領大ヘトマン、1605年より王の秘書官を務めた。王ジグムント 2世アウグストとステファン・バトーリの顧問を務め、ポーランドでも有数のマグナートであった。

<sup>112</sup> Bitwa pod Byczyną 1588年ポーランド王位継承権を主張するオーストリア大公マクシミリアン 3世ハプスブルク軍とジグムント 3世ヴァザの支持者である王冠領大ヘトマン、ヤン・ザモイスキ率いるポーランド軍の間で起こった戦い。ザモイスキ軍が勝利し、マクシミリアンは捕らえられた。

面である。絵の中央には、門の前で馬に乗った 2 人の敵対者がはっきりと描かれている。左にいるマクシミリアンが自分のサーベルを軽蔑のまなざしで顔を背けてながらザモイスキに手渡している。

ザモイスキの後に描かれているのは、ザモイスキ族のバルタザル・バトーリ<sup>113</sup>、その右側にいるのがフサリア隊大尉ミコワイ・ウロヴィエツキ *Mikołaj Urowiecki* とヴィエルニ代官アレクサンデル・コニェツポルスキ<sup>114</sup>である。ミコワイ・ウロヴィエツキは背中に大きな羽根をもつ翼を身に付け、頭には羽根付きの兜をかぶっている。

この絵画では、右側半分がザモイスキ軍、左側半分がマクシミリアン軍に分かれている。マクシミリアン軍には左側隅にマスケット銃を手にした歩兵が数名と、長槍が数本見える。絵画下部ではマクシミリアン軍が負けた代償として、所持していた剣をザモイスキ軍に渡している。一方ザモイスキ軍が持っている武器は、あまりはっきり見えないが、右隅にいるフサシュが剣を上に掲げ、その後に長槍が 2、3 本ある。所持する武器を比較すると、マクシミリアン軍の方が多くの武器を保有しているように見えるが、状況と絵のもつ雰囲気は、ザモイスキ軍の方がより威圧的である。その要因として挙げられるのは目線であろう。ザモイスキ軍の騎兵はほとんどが背筋を伸ばし、目をマクシミリアン側へまっすぐと向けている。一方マクシミリアン軍は顔がいろいろな方向を向いていて雑然とした印象を与える。

ザモイスキ軍の毅然とした雰囲気を引き立てるものとしてフサリアの存在をあげることができるだろう。全身に甲冑をまとい、背中に大きく羽を広げた翼を背負う彼らは、その外観だけで十分相手を怖気付かせることができたと思う。

c) 『スモレンスクのヴワディスワフ 4 世』 *Władysław IV pod Smoleńskiem* {szkic} (1892)



図 46

<sup>113</sup> Baltazar Batory (-1594) ポーランド王ステファン・バトーリの甥。

<sup>114</sup> Aleksander Koniecpolski (1620-1659) ポーランドの辺境のマグナートで多くの国境地域の知事を務めた。

1609年から1618年の間ポーランドとモスクワの間で起こった戦いは、1619年デウリノの和約<sup>115</sup>によって終結した。ポーランド＝リトアニア共和国は和約締結によってスモレンスク、チェルニフ<sup>116</sup>を得た。1632年秋、モスクワ軍はスモレンスクを包囲し戦闘を再開した。包囲が10ヶ月経過したところで、ヴワディスワフ4世が25000人の軍の先頭に立ち、急いでスモレンスクへ向かった。1634年夏、ミハウ・ボリソヴィチ Michał Borysowicz 率いるモスクワ軍は降伏した。

マテイコが描いたのは、まさにモスクワ軍が降伏した場面である。絵の中央に描かれているのが、王ヴワディスワフ4世である。王の右側でかがんでいる男性が、モスクワ軍の指揮官である。彼は王の前に自分の軍旗を置き、敗北を認めた。ヴワディスワフ4世の後方に馬に乗って描かれている人物がリトアニアの大ヘトマン、クシシュトフ・ラジヴィウ<sup>117</sup>、スモレンスク知事アレクサンドル・ゴシェフスキ<sup>118</sup>、王の弟ヤン・カジミェシュ、ポーランド王国大臣ヤクフ・ザジック<sup>119</sup>である。彼らの後ろにいるのが、ポーランド軍である。

軍旗を持った旗手官の後ろに、小旗をもつフサシュたちがいる。フサシュー一人一人の姿は鮮明に描かれていないが、彼らの翼ははっきりとわかる。翼は小旗と一緒に密集して描くことで、ポーランド軍の力強さを感じさせる。

モスクワ軍指揮官の後ろに一人のフサシュがいる。彼の役職についての説明がないのははっきりとはわからないが、位の高い軍人だと思われる。彼が手に持っているのはブンチュクのように権力を象徴するものであろう。かなりの権力をもつ人物お付の軍人だと考えられる。王がいることから、もしかしたら王付きの手官かもしれない。彼は馬に乗り、鎧を身につけ、背中に翼を背負っている。集団から独立して描かれた姿は、位の高さとその強さを感じさせるようである。

---

<sup>115</sup> Rozejm w Dywulinie 1618年12月11日に調印され、1619年1月4日に発効した講和条約。この条約によりポーランド・リトアニア共和国は東へ領土を伸ばした。

<sup>116</sup> Czernichów ポーランド・リトアニア連合王国の王国領にあった県。マウオポルスカの一部で、王国領東部の辺境の地にあった。

<sup>117</sup> Krzysztof Radziwiłł (młodszy) (1585-1640) ポーランド・リトアニア連合王国のシュラフタ、公で、同時代における最も有力なマグナートの一人であった。父クシシュトフ・ラジヴィウ・ピョルン(Krzysztof Radziwiłł Piorun)と区別するために姓の末尾に„młodszy”をつけることがある。1615年よりリトアニア領野戦ヘトマン、1633年よりヴィエルン城代と知事、1635年よりリトアニア領大ヘトマンを務めた。

<sup>118</sup> Aleksander Gosiewski (?-1639) 1610年よりリトアニア記録官、1615年よりリトアニア書記官、1625年よりスモレンスク知事、1630年よりリトアニア野戦書記官を務めた。

<sup>119</sup> Jakub Zadzik (1582-1642) ポーランド・リトアニア連合王国のシュラフタ。1635年よりクラクフ司教を務め、後に王冠領大法官になった。外交官。

d) 『プスコフのステファン・バトーリ』 *Stefan Batory pod Pskowem* (1872)



図 47

プスコフの戦い(プスコフの包囲)はステファン・バトーリが行った第三次リヴォニア遠征である。1577年から1582年の間、ポーランドはリヴォニアをめぐってモスクワと争っていた(ポーランド=モスクワ戦争)。1581年、ステファン・バトーリはプスコフ制圧とイヴァン4世に休戦条約を締結するよう求めるため新しい戦いを開始した。ポーランド=リトアニア連合軍による1581、82年のプスコフ包囲は失敗に終わった。ロシアはスウェーデンの進軍に直面し、休戦条約を結ばなければならなくなった。教皇グレゴリウス13世<sup>120</sup>の教皇特使アントニオ・ポッセヴィーノ<sup>121</sup>の調停の下、休戦条約が締結された。

この絵において、マテイコはモスクワ公国との幾つかの出来事を合わせて描いている。バトーリがヴィエルキエ・ウーキにおいてモスクワ大公国の使節団を受け入れた場面(1580年)、ポーランドにおけるプスコフの攻囲(1581年)、ヤン・ザポルスキでの休戦条約の締結といった出来事を総合している。<sup>122</sup>

<sup>120</sup> Grzegorz XIII (1502-1585、ローマ教皇在位 1572-1585)

<sup>121</sup> Antonio Possevino (1533-1611) イタリア人外交官、イエズス会士。

<sup>122</sup> 参考文献(16)、108頁に拠った。



図 48

構図の左側に座って描かれているのがポーランド王ステファン・バトーリで、中央には翼を身につけた人物がいる。彼は、のちに王冠領大ヘトマンになるスタニスワフ・ジュウキェフスキ<sup>123</sup>(図 48)である。ジュウキェフスキはポーランドにおいて英雄的存在である。ジュウキェフスキは、1610 年対モスクワのクウシンの戦いで大勝利を収め、1620 年対トルコのツェツォラの戦いで命を落とした。異教徒のトルコ人に対し、最後まで勇敢に戦い続けた人物として伝説的な存在となった。プスコフの戦いの時は、まだヘトマンではなかった(1588 年より王冠領野戦ヘトマン、1618 年より王冠領大ヘトマン)。マテイコがまだヘトマンではないジュウキェフスキを描いたのは、彼の英雄性を絵画に埋め込みたかったのではないだろうか。ジュウキェフスキの勇敢さと異教徒を恐れない強さを暗示することで、よりポーランドの強さを誇張しようとしたのだ。

ジュウキェフスキの右側にはポーランド軍がいる。その中にフサリアがいる。集団でいるためはっきりとした形はわからないが、小旗と翼の間に甲冑を装備した騎兵の姿が見える。頭上高く伸びる翼がたくさんある。羽根が広がって描かれているものもあれば、小旗のようにまっすぐな線だけで描かれているものもある。背景の一部ではあるものの、密集して描かれることで、そこだけ戦場にいるような臨場感をもっている。

#### b) ユゼフ・ブランド(Józef Brandt / 1841-1915)

19 世紀後半に活躍した戦争画家の一人である。1870 年代と 80 年代に、ポーランド芸術

<sup>123</sup> Stanisław Żółkiewski

におけるミュンヘン派の代表者であった。1841年にシュチェブジェシ<sup>124</sup>で生まれ、1915年ラドム<sup>125</sup>で亡くなった。

ブランドはパリとミュンヘンで絵画を学んだ。アレクサンデル・ギェリムスキ<sup>126</sup>、アルフレット・コヴァルスキ=ヴィエルシュ<sup>127</sup>、タデウシュ・アウドウキエヴィッチ<sup>128</sup>、ヴォイチェフ・コサック<sup>129</sup>、レオン・ヴィチュウコフスキ<sup>130</sup>と関連のある、いわゆるポーランド絵画のミュンヘン学派のリーダー的存在になり、1875年から私営の絵画学校を運営した。ブランドは主に風俗的戦争画や、コサックとタタールとの戦いに関するテーマの歴史画、17世紀のスウェーデンとの戦いを扱った歴史画を描いた。ブランドの作品は、題材の文学的表現、細部にわたる写実主義、自由な構図を特徴としている。ブランドはポーランド画家、またはポーランド文学(例えばヘンリク・シェンキェーヴィチの『トリロギア』)に強い影響を与えた。ブランドはラドム近辺のオロンスコ村<sup>131</sup>に土地を所有していた。彼はそこで人生の大半を創作活動や学校の運営を行った。

ユゼフ・ブランドの絵画について、同時期に文学界で活躍したヘンリク・シェンキェーヴィチが以下のように述べている。

“大草原、馬、草原の荒れ果てた魂、遠い昔に繰り広げられた血なまぐさい場面においてユゼフ・ブランドに匹敵するものはいない。こうした絵画は物言う絵画である。というのも、これらを見ていると古い伝承、古い唄、古い騎士物語、言い換えれば、昔あったもの、過ぎ去ったもの、詩の中に閉じ込められたものが脳裏によみがえるからである。ブランドはゴシュチンスキ<sup>132</sup>、ザレスキ<sup>133</sup>、ベニョフスキ<sup>134</sup>を書いたスウォヴァツキ<sup>135</sup>のような草原の詩人である。過ぎ去った時間は彼の絵筆でよみがえり、ある一つのエピソードを目にすると、知らず知らずのうち、心の中に騎士道的コサック的全体が再現される。”<sup>136</sup>

<sup>124</sup> Szczebrzeszyn ルブリン県にある街。

<sup>125</sup> Radom マゾヴィエツ県にある街。

<sup>126</sup> Aleksander Gierymski (1850-1901) 19世紀に活躍したポーランド画家。

<sup>127</sup> Alfred Kowalski-Wierusz (1849-1915) ポーランドの画家。

<sup>128</sup> Tadeusz Ajdukiewicz (1852-1916) ポーランドの画家。肖像画、戦争絵画、風俗画を描いた。

<sup>129</sup> Wojciech Kossak

<sup>130</sup> Leon Wyczółkowski (1852-1963) ポーランドの画家。「若きポーランド」の指導的人物の一人。

<sup>131</sup> Orońsko

<sup>132</sup> Seweryn Goszczyński (1801-1876)

<sup>133</sup> Bohdan Zaleski

<sup>134</sup> Beniowski ユリウシュ・スウォヴァツキの書いた叙情詩。

<sup>135</sup> Juliusz Słowacki (1809-1849) ポーランド・ロマンティズムの時代に活躍した最も著名な詩人の一人。ミツキェーヴィッチ、クラシンスキ同様、詩聖(wieszcz)の一人。

<sup>136</sup> [http://iskry.pl/index.php?option=com\\_content&task=view&id=3803&Itemid=3](http://iskry.pl/index.php?option=com_content&task=view&id=3803&Itemid=3)  
より引用

ブラントは、当時民衆から絶大な人気を博していたシェンキェーヴィチが絶賛するほどの歴史絵画を描いた。ブラントは“物言う絵画”を描き、様々なものを人々に語ったのだ。

a) 『フサシュ』 *Husarz* (1890)



図 49

この絵は、フサリアやフサシュを調べた時に真っ先に出てくる絵画の一つである。フサシュを題材とした絵画の代表といっても過言ではない。

中央前面にいるのがフサシュである。彼は右手に小旗を、左手に手綱をもち、馬を操っている。頬宛と首の保護板付きの兜をかぶり、上半身の鎧をまとっている。腰には豹か虎の毛皮をまとい、その近くにサーベルを携帯している。フサシュの特徴としてよく挙げられる翼を身につけてはいない。毛皮をまとことができるのは、位の高い人物、つまり王、王族、ヘトマン、フサリアぐらいである。王、王族、ヘトマンは小旗を持つことがないので、彼はフサシュだと思われる。豪華な装備をし、馬上で毅然とした態度で前を見据える姿から、フサシュの気高さや強さが感じられる。

フサシュの背面にはたくさんの兵士がいる。私の予想なのだが、これは出陣の前の様子

を描いた作品なのではないだろうか。何故ならば、装備がまだ傷が無い状態で、フサシュの前後で隊列が綺麗に分かれているからである。これが戦いの最中や、戦後の場面だったら、もっと雑然とした状態になっているだろう。

フサリアの背面には、赤い服を着た指揮官と思われる人がいる。手に権力の象徴であるブズディガンも持っている。また彼の後ろにはブンチュクが見える。ブンチュクは、軍における権力の象徴なので、赤い服を着た人物はヘトマンやそれに次ぐ階級の人だと推測できる。

全体的に、毅然とした雰囲気と緊張感を感じさせる。『フサシュ』とタイトルが付けられた絵画で、この絵のように動きが激しくなく、一点をクローズアップしたものは少ないと思う。フサリアを題材としたものでは、戦いの最中の突撃を描いたものや式典時を描いたものが多い。ブランドは、この場面を描くことで、フサシュの戦いに対する毅然とした姿勢やフサシュの気高い雰囲気を伝えたかったのではないだろうか。

### c) ヴォイチェフ・コサック(Wojciech Kossak / 1856-1942)

ヴォイチェフは1857年12月31日にパリで生まれた。父ユリウシュ・コサック<sup>137</sup>に教わり、小さいころからたくさんスケッチをした。1871年クラクフの芸術学校<sup>138</sup>に入学し、ヴワディスワフ・ウシュチュキェヴィッチ<sup>139</sup>の弟子になった。1873年ミュンヘンでの勉強を開始した。1877年ヴォイチェフは5年間の予定でパリへ向かい、そこで有名の画家の下につき勉強した。ヤン・スティカ<sup>140</sup>と一緒に、コシチューシコ蜂起100周年の時にパノラマを描いた。このパノラマは1894年ルヴフで展示され、観客たちから熱狂的に歓迎された。この絵の成功はヴォイチェフ・コサックによる歴史戦争絵画の継承に役立った。

<sup>137</sup> Juliusz Kossak (1824-1899) ポーランドの画家。歴史絵画、戦争絵画を得意とし、特に馬を好んで描いた。

<sup>138</sup> Szkoła Sztuk Pięknych w Krakowie

<sup>139</sup> Władysław Łuszczkiewicz (1828-1900) ポーランドの画家、教育者、芸術歴史学者。

<sup>140</sup> Jan Styka (1858-1925) ポーランドの画家。

a) 『フサリアとヘトマン、ジュウキェフスキ』 *Hetman Żółkiewski z husarią* (1936)



図 50

フサリアの隊列の前にヘトマン、ジュウキェフスキがいて、騎兵の一人がラッパを吹いている。これはおそらく出陣前の場面を描いたものであろう。ヘトマンの後ろに控える騎兵全員がフサシュであることから、フサリアとヘトマンの関係性の強さを感じさせる。

まず、この絵の主演であるヘトマン、ジュウキェフスキについて考察していきたい。ジュウキェフスキは一人列からはずれ前にいるものの、左寄り後方に描かれているので、それほど存在感は強くない。ジュウキェフスキは大きな毛皮のマントを羽織り、手には権利の象徴であるブズディガン<sup>141</sup>を持っている。大体、軍の最高司令官はブズディガンを持ち、命令を下すときにブズディガンを前に突き出す。ジュウキェフスキも例に漏れず携帯している。また、ジュウキェフスキは黒い毛の馬に乗っている。周りの騎兵の馬を見ると黒い馬は一頭もない。実際、全身真っ黒の馬(青鹿毛)はほかの毛色に比べて出現率が低い。貴重な黒毛馬に乗ることは権力の表れだったのだろう。

次に、ジュウキェフスキの後ろのいる隊列に注目したい。2人いるラッパ吹きは甲冑を装備していない。彼らは戦わずに、出陣前にラッパを吹き、士気を上げるためにいるのだろう。周りのフサシュは小旗を持ち、空に向けている。全身に鎧を身につけ、翼は頭上でカーブしている。腰に長剣コンツェシュを装備している。

要塞を守るための戦いを前にして、騎兵たちの緊張感と士気が伝わってくる絵である。

<sup>141</sup> buzdygan

b) 『キルホルム』 *Kircholm* (1925)



図 51

1605 年にポーランドとスウェーデン間で起こったキルホルムの戦いを題材としている。絵画の手前はポーランド軍フサリア部隊の突撃、後方にはポーランド王ジグムント 3 世とその軍、左隅には帆船が描かれている。

下半分に描かれたポーランド軍(フサリア)は幾つかの小隊からなっている。構図の左と中央にある小隊には、それぞれ毛皮をまとった指揮官と思われる人物がいる。各フサシュが小旗付きの長槍を地面に平行にして構え、身体を前かがみにして突撃している。小旗のはためきと翼の羽根、馬が巻き上げる砂埃によって、凄まじい勢いで駆けているように見える。フサシュ全員が鼻板付きの兜をかぶり、翼を背負っている。フサリアと疾走、突撃、力強さの関係性を感じさせる描写である。

c) 『兵士の夢』 *Wizja żołnierska* (1935)



図 52

非常に興味深い題材を扱った絵画である。解説がないので、私なりの解釈になってしまうが、この絵はすでにフサシュが存在しない時代、おそらく両大戦間期に、寝ているポーランドの軍人が見たフサシュやその他の兵の幻が描かれているのではないだろうか。左下にいる2人の兵士から疲労感が伝わってくる。2人の兵と中央に描かれた集団の間には、白い靄のような境界線がある。この靄が現実と幻想の境目なのだろう。

中央に描かれたフサシュに注目したい。彼は他の兵よりも一回り大きく、また細部にわたって描かれ存在感がある。右手に小旗付きの赤い長槍も持ち、左手だけで馬を操っている。鎧の上の大きな毛皮をまとい、背に翼がある。この翼が背中にくくりつけてあるのか、鞍につけてあるのかは判断できない。

フサシュを中心にして、右半分が17世紀以前の軍隊、左半分が18世紀以降の軍隊だと推測される。その理由として、右半分の兵の中に、翼や軍旗、長槍が描かれていることが挙げられる。1775年、翼を装備したフサリアは廃止されてしまった。18世紀前半には軍事的役割より儀式役割の方が多く、フサリアが戦場で活躍したのは17世紀までだった。

軍旗(chorągiew)が実際にいつまで頻繁に使用されていたのかはわからないが、ホロンギエフ(chorągiew)という騎兵隊の単位は14～18世紀前半まで使用されていた。長槍は17世紀後半までは主要な歩兵用武器だったが、銃剣の発明により射手が近接戦闘も行えるようになると、完全に姿を消した。翼(フサリア)、軍旗、長槍は17世紀以前を象徴するものといえる。

左半分の騎兵の装備品を見ると、ナポレオン戦争時の軍服を思い起こさせる。ナポレオ

ン戦争では、ポーランド騎兵は軍の騎兵の中でも最強の部類だった。

中央に描かれた幻の騎兵たちはポーランドの強かった軍事力の象徴であり、苦戦を強いられた両大戦間期のポーランドにおいて、縋りつきたい過去の栄光の象徴だったのではないのだろうか。

### 3. まとめ

絵画において、フサリアがどのように描写されているか見てきたが、フサリアの象徴性がわかった。

その最大のものは翼である。フサリアまたはフサシュを描いたもののほとんどが翼と共に描かれている。それは、版画と 19、20 世紀の歴史画両方に言えることである。版画の場合、詳細な描写ではなく、イメージが先行した天使の翼のような形状をしたものが幾つか見受けられた。これは起こり易い間違ったフサリアの翼のイメージではある。また、翼がくくりつけられている位置は、背中と鞍の両方あった。翼がどこにつけられているのかは重要ではなく、翼を装備していることが重要なように感じられた。版画と 19、20 世紀の歴史画では画法がちがうため、比較することは難しいが、19、20 世紀の歴史画の方が、上へとまっすぐ伸びている印象を与えた。

フサリアが描かれた場面では、戦いの最中よりもそれ以外の場面が多かった。戦いの最中を描いたものの場合、ヴォイチェフ・コサックの『キルホルム』のように集団の突撃シーンが多い。単独で攻撃をしている絵画は見たことが無いので、フサリアの攻撃といえば、集団突撃戦法が思い浮かぶのだろう。戦い以外の絵画は、版画では行進や閲兵式の場面、19、20 世紀の歴史画では、戦闘前後のものが挙げられる。版画は諸外国の版画家が手がけたものが多かったため、フサリアが公式行事で現れる閲兵式などの場面が多く描かれたのだらう。19、20 世紀の歴史画で描かれた戦い前後の様子は、フサリアを含めたポーランド軍の威厳、気高さを感じさせるものが多かった。

フサリアは好意的、肯定的に描かれていた。それが顕著なのが 19、20 世紀以降の絵画である。国家が消滅してしまっただ中で描かれたポーランドの歴史画は、過去の栄光を題材としている。その歴史画でフサリアが頻繁に登場するということは、ポーランド人にとってフサリアは過去の強さを象徴する誇りといっても過言ではないだろう。

## おわりに

フサリアについて様々な観点から考察してきたが、幾つかの共通点や特徴が見えてきた。一つ目はフサリアを象徴するものである。その代表的なものとして挙げられるのが翼である。文学や絵画に登場するフサリアはほとんど翼を装備していた。諸外国で描かれたフサリアの版画には必ず翼が描かれていた。ポーランドに比べて情報が少なかった他国で彫られたものに翼があるということは、フサリアにとって翼は欠かせないものだと捉えられていたことの表れではないだろうか。翼の他には、突撃、疾走、騒音がフサリアを象徴するものとして挙げられる。これらはフサリアの戦法に深く関係するものである。文学作品や絵画でフサリアが密集して描かれていることが多いことからわかるように、フサリアは集団での突撃を得意としていた。集団で突撃することによって、相手に与える衝撃は、物理的にも精神的にも威力を増した。馬の蹄や翼があげる騒音は凄まじく、嵐(burza)のようだと比喻されている。突撃によって敵に与える恐怖感や圧倒感と、実際の突撃の威力が結びつき、フサリアのイメージの典型となったのだろう。

二つ目が「過去のもの」としてのフサリアである。これが顕著に現れていたのが19世紀の文学作品の中であった。過去のことを列挙する際にフサリアが挙げられていた。ポーランドの歴史の中で、数々の戦いに貢献したフサリアを、素晴らしいものとして表現する一方、亡霊や幻だと表現している。フサリアはすでに失われたものであり、現実世界においては幻でしかない、という解釈をしているように感じられた。それを決定付けるのが、ヴォイチェフ・コサックの『兵の夢』であろう。あの絵から、19、20世紀当時のポーランド人の現状と心境が伝わってきた。ポーランドにおいて、フサリアは光と闇の二面性をもつ過去のものだったのだろう。『兵の夢』が描かれた両大戦間期までフサリアのこのようなシンボリズムが存在したのだ。

フサリアをさまざまな角度から考察する中で気になったことが幾つかある。一つ目は、フサリアについての記述に否定的なものがほとんど無いことである。教育、文学、絵画において、悪い表現や内容は見られなかった。どれにおいても「最強、無敗、気高い、威厳」などといったイメージにたどり着くように表現されている。否定的な表現は無かったが、それと同時に、客観的な記述もほとんどなかった。どれも詩的な表現で、史実に基づくものというよりも、フサリアのもつイメージが先行して描かれているように感じられた。

二つ目は、フサリアの個人名が一つもなかったことである。フサリアはポーランド軍の中で英雄的な存在であった。その中で卓越した人物の名前がどこかにあってもよさそうだが、現段階で見つけることができなかった。フサリアは単独のイメージよりも集団のイメージの方が強いことの表われなのだろうか。ポーランド軍の歴代の英雄というと、例えばヘトマン、スタニスワフ・ジュウキエフスキやヤン・カロール・ホトキエーヴィチ、ヤン・ソビエスキなどが挙げられる。皆ヘトマンとして名前を馳せた人物である。フサリアはヘ

トマンのすぐ近くで攻撃をした部隊である。実際フサリアがもたらした勝利が、軍の最高司令官のヘトマンの手柄になってもおかしくない。フサリアはあくまでも騎兵隊であり、ヘトマンのように脚光を浴びる立場ではなかったということなのかもしれない。

ポーランドにおけるフサリアの役割は、18世紀を境に変化したように感じられた。14世紀に登場し、1775年に廃止されるまで、純粋に戦力が重要視されていた。ポーランドが大勝したり、苦戦を強いられたりした戦いには必ずフサリアが参戦している。それ以外では、権力と軍事力を誇示するための道具として利用された。閲兵式や行進がそうである。他国にポーランド軍が入城するとき、ポーランド軍の代表として、豪華絢爛な装備で参加している。軍事力が国力を決める時代だったので、豪華絢爛な装備を基本形としていたフサリアは、ポーランドにとっては他国に国力を示すための大事な道具であり、他国にとってはポーランドの国力を測るための重要な指針だったのである。

18世紀にポーランドが分割され、フサリアも廃止されてしまった。19世紀のフサリアの役割は「愛国心を刺激するもの」であった。過去の栄光を思わせ、愛国心を鼓舞するような作品にフサリアが数多く登場した。ヘンリク・シェンキエーヴィチ、スタニスワフ・ヴイスピャンスキ、ヤン・マテイコ、ヴォイチェフ・コサックなどが、歴史を扱った作品の中でフサリアを登場させた。しかもフサリアを悪く表現することなく、詩的に、劇的にフサリアを表現している。現在フサリアを扱った代表的作品といわれているものは、ほとんどが19世紀に発表されたものである(例えばシェンキエーヴィチの『トリロギア』やユゼフ・ブランツの『フサシュ』)。19世紀に作られたフサリアのイメージが強力で、ポーランド文化の中に広く、また根強く受容され、それがステレオタイプとなり、今日まで鮮明に残っているように感じられた。したがってフサリアの史実は少なく、「翼、突撃、馬、最強、無敗、気高い」などというような決まりきったものばかりで表現されるのではないだろうか。

最後に、この場を借りて本論文を執筆するにあたってお世話になった方々に心から御礼申し上げたい。指導教官である関口時正先生には、いつものご指導や、適切な文献を提供いただいたことに深く感謝を申し上げたい。また、執筆時に相談に乗ってくれたポーランド語科の先輩方や同期、家族や友人たちにも心から感謝を表す。

## 参考文献

- (1) Jerzy Cichowski, Andrzej Szulczyński, *Husaria*, Warszawa 1977, Wydawnictwo Ministerstwa Obrony Narodowej.
- (2) Jerzy Malinowski, Krystyna Sroczyńska, *Matejko : obrazy olejne*, Warszawa 1993, Arkady.
- (3) Juliusz Starzyński, *Jan Matejko*, Warszawa 1973, Arkady.
- (4) Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w holdzie... w stuknie śmierci artysty : katalog wstawy*, Warszawa 1993, Muzeum Narodowe w Warszawie.
- (5) Henryk Marek Słoczyński, *Matejko*, Wrocław 2000, Wydawnictwo Dolnośląskie.
- (6) Kazimierz Olszański, *Wojciech Kossak*, Wrocław Kraków 1976, Zakład Narodowy im. Ossolińskich.
- (7) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, Osprey Publishing.
- (8) Paweł Hertz, *Księga cytatów z polskiej literatury pięknej od XIV do XX wieku*, Warszawa 1975, Państw. Instytut Wydawniczy.
- (9) Stanisław Szostakowski, *Historia 6 : Polska w latach świetności i upadku (XIV-XVIII w.)*, Warszawa 1994, Wydawnictwa Szkolne i Pedagogiczne.
- (10) Stanisław Marciniak, Marek Szyszko, *Historia Polski dla Piotrka*, Warszawa 1994, Polonia.
- (11) チェスワフ・ミウオシュ著 ; 関口時正 [ほか] 訳『ポーランド文学史』、2006年5月10日発行、第1版、未知谷。
- (12) ステファン・キェニエーヴィチ編 ; 加藤一夫, 水島孝生共訳『ポーランド史1』、1986年11月15日、第1版、恒文社。
- (13) 伊東孝之, 井内敏夫, 中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』、1998年12月15日、第1版、山川出版社、115～174頁。
- (14) イエジィ・スコヴロネク「ナポレオンに対するポーランド貴族の姿勢——拒否か協力か——」、阪東宏編『ポーランド史論集』、1996年12月30日、第1版、三省堂、6～15頁。
- (15) ヨアヒム・ブムケ著 ; 平尾浩三 [ほか] 訳『中世の騎士文化』、1995年5月10日、第1版、白水社。
- (16) 小川美穂、東京外国語大学平成20年度修士論文『ヤン・マテイコの主要な歴史画の主題をめぐって』
- (17) 蜂谷有紀、東京外国語大学平成10年度卒業論文『ポーランドの男性民族服「コントゥシュ(kontusz)」にみるオリエンタリズム——オリエンタリズムとシュラフタのイデオロギー——』  
〈インターネット上の情報〉
  - ・ Wikipedia

- [http://pl.wikipedia.org/wiki/Strona\\_główna](http://pl.wikipedia.org/wiki/Strona_główna)
- Galeria Malarstwa Polskiego  
<http://www.pinakoteka.zascianek.pl/index.htm>
- Polish Hussar Supply Plus  
<http://www.polishhussarsupply.com/index.html>
- HUSARIA  
<http://www.husaria.jest.pl/>

## 参考図版

- 図 1 (5 頁)、図 2 (5 頁) は Wikipedia (<http://pl.wikipedia.org/wiki/Husaria>) に掲載されている。
- 図 3 (14 頁)、図 4 (15 頁) は Wikipedia ([http://pl.wikipedia.org/wiki/Bitwa\\_pod\\_Kircholmem](http://pl.wikipedia.org/wiki/Bitwa_pod_Kircholmem)) に掲載されている。
- 図 4 (15 頁) は Wikimedia ([http://commons.wikimedia.org/wiki/Category:January\\_Suchodolski?uselang=pl](http://commons.wikimedia.org/wiki/Category:January_Suchodolski?uselang=pl)) に掲載されている。
- 図 5 (15 頁) は Wikipedia ([http://pl.wikipedia.org/wiki/Bitwa\\_pod\\_Kłuszynem](http://pl.wikipedia.org/wiki/Bitwa_pod_Kłuszynem)) に掲載されている。
- 図 6 (16 頁)、図 30 (49 頁)、図 49 (84 頁) で使用されたユゼフ・ブランドの絵画作品は、Galeria Malarstwa Polskiego (<http://www.pinakoteka.zascianek.pl/Brandt/Index.htm>) に掲載されている。
- 図 8 (19 頁)、図 9 (20 頁)、図 50 (86 頁)、51 (87 頁)、52 (88 頁) で使用されたヴォイチェフ・コサックの絵画作品は、Galeria Malarstwa Polskiego ([http://www.pinakoteka.zascianek.pl/Kossak\\_W/Index.htm](http://www.pinakoteka.zascianek.pl/Kossak_W/Index.htm)) に掲載されている。
- 図 7 (18 頁) は HUSARIA (<http://www.husaria.jest.pl/kopia.html>) に掲載されている。
- 図 12 (26 頁) は Polish Hussar Supply Plus (<http://www.polishhussarsupply.com/Helmets.html>) に掲載されている。
- 図 13 (26 頁) は Nigel Carren of England (<http://www.nigelcarren.co.uk/polish-winged-hussars-szyszak-helmet.htm>) に掲載されている。
- 図 23 (41 頁) は Wikimedia ([http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koncierz\\_Muzeum\\_Zagłębia.JPG](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koncierz_Muzeum_Zagłębia.JPG)) に掲載されている。
- 図 24 (42 頁) は CM Polosh HQ

- (<http://www.forum.cmhq.pl/index.php?link=1&id=756>) に掲載されている。
- 図 27 (48 頁) は Polish Hussar Supply Plus (<http://www.polishhussarsupply.com/Weaponry.html>) に掲載されている。
  - 図 28 (48 頁)、図 44 (76 頁)、図 47 (81 頁) で使用されたヤン・マテイコの絵画作品は Galeria Malarstwo Polskiego (<http://www.pinakoteka.zascianek.pl/Matejko/Index.htm>) に掲載されている。
  - 図 29 (48 頁) は Wikipedia ([http://pl.wikipedia.org/wiki/Stanisław\\_Żółkiewski](http://pl.wikipedia.org/wiki/Stanisław_Żółkiewski)) に掲載されている。
  - 図 35 (69 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.8-9.
  - 図 36 (70 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s. 10.
  - 図 37 (70 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.11.
  - 図 38 (71 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.12.
  - 図 39 (71 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.21.
  - 図 40 (72 頁)、図 41 (73 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.22.
  - 図 42 (73 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s. 23.
  - 図 43 (74 頁) Richard Brzezinski, Velimir Vuksic, *Polish Winged Hussar 1576-1775*, Great Britain 2006, s.44.
  - 図 45 (78 頁) 『ビチナのザモイスキ』 Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w holdzie... w stukienu śmierci artysty : katalog wstawy*, Warszawa 1993, s. 167.
  - 図 46 (80 頁) 『スモレンスクのヴワディスワフ 4 世』 Ewa Micke-Broniarek, *Matejce w holdzie... w stukienu śmierci artysty : katalog wstawy*, Warszawa 1993, s.197.
  - 図 48 (82 頁) は図 47 を筆者が編集した。